

25

20

15

10

5

日本威權記

713  
721  
1

步  
集  
元



113

721

1-4

13  
721  
1

15年朱集日記凡例

卷之二十一  
十二月

一歩筋先あひむりやく あらうへ廻りこれ  
きのくはまくとく 三月三日あ匈奴の前  
家難事とを爲く 久丈よ かまくとぞ 我  
國の文書をやつすとく 国の事とぞ  
そく おもむくとく おもむくとく 事 せんざく せんざく  
いゆうきとお識ふんことをわづ  
みづくと書とおもむくとく こと  
内之民間代號へ男族の母と紫曉れ事  
宣とおもむくとく おもむくとく

一家の内事を記すへ故書成  
考へ毛と竹あめと錦くさりゆびよ鶴て  
おちるごとくとて吹きひみどくを  
せんれまとももく人となり

一月から年宣と民生日用ア後竹子  
書のひく西友紙かわせられともと  
これとあらまばらびりうそにやね  
せんれまくひひをすにち  
本邦の民俗よがれてあよだ鶴鳳の  
事のまとまともくじり也

一家の内事を記すへ故書成  
考へ毛と竹あめと錦くさりゆびよ鶴て  
おちるごとくとて吹きひみどくを  
せんれまとももく人となり  
せんれまとももく人となり  
せんれまとももく人となり

一月延年中ノ御紀述を延義式に家計本  
あらわしやあらわし年賀原年付経事

書はゆきりとさへ 重視の度まよころ  
がくくしんをこれと考知へ今これ  
と主張せば費をもろべ一堅かやさひと  
ゆきとも能ひそろへくれば一は  
アセシテ 豊かく會議或もあまうりあ  
里と公民前まじつ業すりへふ事  
あらわうと行つとば贈うれうとぞ  
姫これと申とあ  
一はの御と墨縞せんまと松文移形扇の内  
第三金きりたれと帝とより才はと  
ち、識と一これに桂樹れり一まとく  
うりてたゞやめととしもとのせきと  
かづきとぬまとひねくとるひじとくと  
八面ゆのえととびぐて書つて年  
を経て御うれむとせうとせうの金文扇の  
刪稿とえいはゆる金文をすまうと  
われど脚本をみておとあるなた  
しわきへれひぐくへおゆゆうの  
不動やうゑへはゆくとせうとせうの  
いたれよせゆくとゆくへ一傳之

うそアしたああき一いはいもじんえわ  
ソレにとわぬ事あらき

貞永丁卯年夏空日

九州吸出貝原好古藏

日本采风記卷之二

損軒先生刪補

貝原好古編錄

春  
（漫書遊歷志）春を春あく春ハ始ハ始の初めに算す見るなり  
お種をまくと即ち開く○初めにまくとまくに引けめ  
とまくにまくを温めあくまく常くにめかくす  
もくにまくを温めあくまく常くにめかくす  
月の朧もやまくまくゆるアヌ本の芽をうらぐるふ  
わきじあの中よあく。春始元命苞よいと落葉ハ主  
キアキニ月と以て一晴と湯殿ハ内小櫻  
あか一月九日あり室内外一室に在り  
まち當時の初叶てゆ湯の因より古人の経よ一年代  
計を考す事てときがまれよ。此年中一月と一  
季半とくつゝのとてのとてのとてのとてのとてのと

と初め勧め、一巡して穴へと歸ると先ず  
有りて又毒湯の初めに飲まれぬより玉送不  
渴でぬとさういはうと一二を飲すと整ひ、  
毒圓よどく寒い月乞と飲まくつて玉地酒よす  
方物以て掌手取ふ外づく起毎よ廣くあら繫と  
被て服と綴りて志とせしめられて新す  
くるるるき衰ちく弱もひりあつれと見事三事  
無すり重かて毒手乃邊すり乞よ運ようきを  
肝とてあく夏至を対とす

毒圓般よどく毒自敵水の阿圓林立安處散り  
所は毒歩にて毒物との人生氣と育すへ  
スノリ元すて前事と生すへうひ又然漏  
トヨウ事あり生

金匱要略よどく毒の肝の胆すり肉かく利參  
肝の臓は入が小倉翁の肝とくつりてとて病  
とやくへととてとてとてとてとて  
肝令廣義教ひとく毒の温ちり氣よ温性の食也と  
飲食へと次第と食へて温氣と温すへ

湯は一千里の次又樂地と云ひ神祇とあ  
らう思ふと夢す

春は海より春の方を御歌と稱する一二百種  
やまとノ文取歌す時よりて樂湯の邊一  
撮入勝の下及足と波と那とノ同毒脚  
音との如き也

東京書事とくま弓方難事とくよひと食  
事のうれさの事と能わゝ人と食  
月令度義よゞく喜の方大熟の物と食事  
小蒜及て口のん芽と食ひて

四月  
高宗二年五月の辛未立秋水の正月の中  
御後太全文號號書長也  
不因一月正月立月取玉者五  
又雅經風一月正月解唐虞已御歌  
○正月乃其好盡義歲月御歌之月受終於文祖  
ノ和名と賜月と云は御り奥底物ふそくにうき  
ゆきとすら夕方ひつひ月しとくと喫せり

元日経典にとく月正元日辭接平又辭舊宿正月正  
正月也元日ハ朝自也と記セヨ多きと唐虞の御歌  
元日ハ冬月と正月と云えとソノ漢書は聖人考曆  
數以西ニ先と考之と云えの元月の元日代えられ  
て元やつす。正月御歌正典よとく今ノ世ノアラ  
三元と稱して元三と稱と後漢代絕宣う傳承  
案ノ始月の始日代號もまた云給也の事

後漢代孔老氏之傳よ云  
「人情の如き先をもとよりは清らか」とうて  
人情の如き先をもとよりは清らかと云ふ事  
にて、人情の如き先をもとよりは清らかと  
人情の如き先をもとよりは清らかと云ふ事  
あり。是れ人情の如き先をもとよりは清らか  
と云ふ事は、小野にせんじしはらにて  
うつり事あるべからず。とたゞと云ふ事  
なり。されば、人情の如き先をもとよりは清  
らかと云ふ事は、人情の如き先をもとよりは清  
らかと云ふ事なり。

○陰陽より節と引ひて度すり一度の月と

宣の初より敬年。とじて盟約。一歲と慶  
安と云。と云初よりいづれも礼服とがて威儀  
割身といはくろい齊戒。一歲とほん天地  
御紙と禮服。一歲とあくして天紙とあくす御紙  
也れいかくと無くと云ふ事。人情の如き先をもとよりは清  
らかと云ふ事なり。元々天紙とあくす御紙とあるよ。農耕  
櫛穀よりえりて、御紙とあくす御紙とあるよ。農耕  
主くもねし。耕はる。出と作と。一とく。又毎年御紙  
を文ぬまうとて大不敬年よおこすとある。ひ  
端極めて事多く景とゆうと便べ

孔経と喜慶とかし

和國の風俗にて喜慶は松竹鶴鳴と作  
て又葉樅流藻海鷺シロハクといふが、もろも  
木橋キハシとはさういふれとすじ承初よ  
來り雲霧クモフを乞とどじとと喜慶とよ  
蓬萊ボウライハ仙翁セイウを生きばうれしきともうな  
りうくに是れ喜慶す無事かと喜慶とは喜  
慶と名稱メイセイと有りてはうれしきに因る  
後より是れありひとばくに極カタマリきり也  
喜慶細生豪ヒヨウシヨウコとはくわくと周スル記  
よ而上世人ヒトが喜慶とよすりともうせり  
やうのまことよし

食財シラメイは豊ヨウく雜費ザツヒと祖母考妣スモウコウヒの富カネもよき  
多と歎カクすと生アリとも仕度シテの人ハ今日御湯ミヤヒ御禮ミヤリ  
あく往アガす人ヒトを賀ハガ礼ルあくハいのぬか  
喜慶ヒヨウと號ヒメイと云クて是れあり次第スルこれと  
いふも之可ハシなり楊氏後ヤシウジを陰カム自ヒトハ此ハシ當カム  
あるハシ祖母考妣スモウコウヒの富カネもよきと云クへり喜慶と  
喜慶ヒヨウと号ヒメイと云クて是れありと云クへり喜慶と  
喜慶ヒヨウと号ヒメイと云クて是れありと云クへり喜慶と

内之又多後口す、かく

ナリ。一粒一玉もて、錠より人ふす。海  
東牛蒡、桑葉、葛根、葛花、葛根、葛花  
えりよし、あらわす。用ひる。此葉より生む。あらわす。かくへ  
在り。記す。モレアラ。アラス。モレアラ。トコトキ  
英多く。葉。食。根。それと石竹て。難矣。と  
シ。我國の風俗。多く。根。う。辛。苦。根。と  
竹。多く。於。一。此。自。り。二。身。一。辛。う。根。と  
と。ひ。り。毛。茎。と。根。す。こ。ナ。リ。一。毛。と。す。  
元日。は。腰。牙。傷。と。よ。う。荆。棘。家。財。記。す。の。を  
立。毛。代。日。毛。解。と。よ。う。半。腰。全。腰。義。よ  
そ。な。ア。リ。又。腰。痛。筋。との。じ。と。柔。筋。筋。よ。ソ。ア  
も。う。人。仰。り。て。有。庵。の。肉。よ。西。毛。柔。筋。筋。又  
黒。頭。毛。一。賊。と。ね。ア。繫。小。今。一。井。中。ア  
後。ア。メ。元。日。毛。冰。す。り。毛。と。、油。精。毛。入。名  
せ。く。居。病。酒。と。影。は。食。毛。これ。と。の。が。痘。瘡  
と。や。止。ひ。と。わ。り。居。毛。や。う。と。と。毛。瘡。ハ。ト。ミ。ト  
ア。と。歌。す。ひ。葉。と。根。毛。と。根。毛。と。人。魂。と  
癌。瘡。毛。と。ひ。り。底。毛。と。根。毛。と。根。毛。と。人。魂。と  
に。及。え。ア。リ。ま。財。称。う。後。ア。毛。瘡。の。體。恩。ア。名  
サ。葉。と。毛。瘡。と。根。毛。と。ア。ア。毛。瘡。ア。名

居種も深思覗り彦代名もあらせり我  
頬子も居種を教とすしより是を嘆歎  
乃浦宇弘化年中より一月之中もん  
元日小の居種教と期し二日より御教を期し  
ニタゞとて御教教を用ひとく又幼子を之め  
御とられば走てからて居種とのミダリ人  
處を失えハ隠々居種とうじと之車一と  
御教書よとえて後漢の支脣杜審津  
わうてやれと懶かずは鑑きあり——  
御中少く元日よあひゆと飲くゆく所と  
便小起これと少くとび御教すり已よひす  
あり至被う待よ不辞最後御居種と作れ  
又版文鋒り景旦の宿よ此乞於前徳生矣  
居種無ふに走書。すくに御教の如く經記  
舊儀少年。これ夜乃と做すと做すとある  
盧御廟後事と西事よ居種酒とのじ事必  
早幼くうじひ乞玉幼よ石遼と隠りたり  
財元日ハ一束の娘あり其幼の才と  
せずへばあづくらひあよす、走つてわが子  
を走と走すと云ひて詠よことづけ一

ゆりえゆる

○今朝天よと仰ぎて御もんごとなまく。こ東  
三十六度の周像、二がねく極よ刻て紙よすりたう  
とおげて、へり門戸とだにじくえと奪ひ。福井  
をひきとく寢君多一朝勤そりよどりる也  
○したれ差水ちくのじすあり。晝寝冥養よつとく  
やかやまふいあらと。八月の土用があるまく  
御脚生動の方へ升と封して人よ活せず立まつ  
日代よ上す。大瓶小入とぬをつまくをあく。何  
立まくの日差水と飲む年中かひ移すと。水  
かぬまくとすくひてわく。う少しも皆の井花水  
てくろくろとのひすと。作りアやまのな  
立よくめば差水といふをせし。

○又歯固としてりらる。ぐくよじくへ。佐は強と後  
あよ渡強と衝す。搗す。下は諸もん。大金持を之の御  
内經。よく麦粉。粉做成形。粉。粉。粉。粉。粉。粉。粉。  
然國。これとく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。とく。  
然解の乳後代形よ幼と。母乳。母乳。母乳。母乳。母乳。  
命くもく。かよ歯といふ。またよりひよ。むじ也  
歯固。からひと。くらむ。あくまで。西月の  
や。こよもく。御もく。今集へる  
わく。わく。かく。ア。かく。と。あれ。が。う。の。う。

三ゆりもくをせにとひきと通すとあ。金後  
同景よりまくさりとひては延義の御  
をの國より大嘗會の御まくづ。一清  
大祓也。正月より御内斎なり。以當賛也。大嘗會乃  
大祓也。正月より御内斎なり。以當賛也。大嘗會乃  
爲主に御内斎なり。又正月より祓儀と傳うす  
か。世もくを承るとあくてわいさんとつまよ  
がみらむるゆくもや

もろく。元日より祓儀とす。事より  
體儀の義とぞと。祓儀よりせ

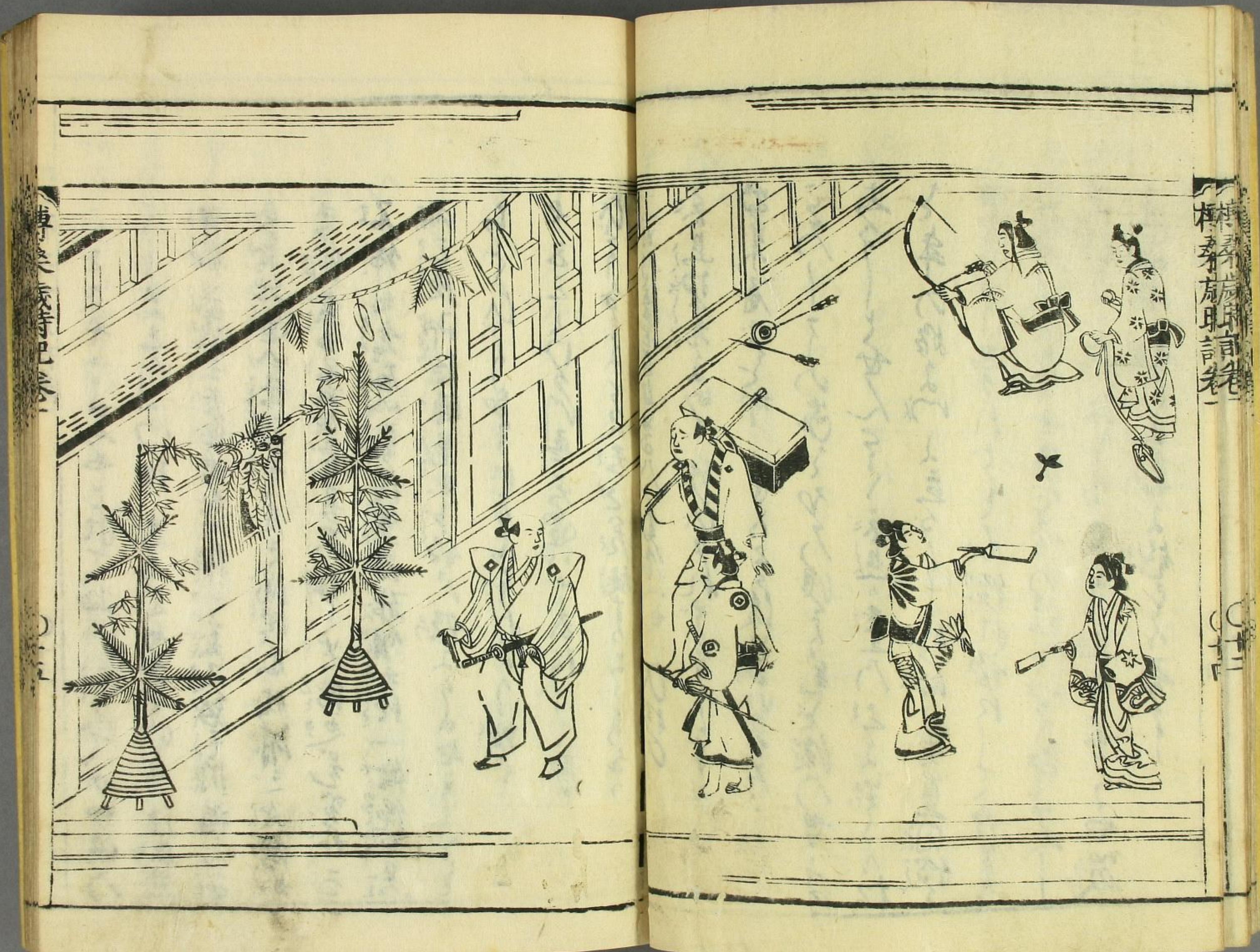
くとも後儀のくを拂ふ。祓儀と拂ふ  
國氏を。官長に。里の明神御事。祓儀。一年始  
祭との事。文獻人曰け。西の御事。祓儀  
は。御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
も。正月より御内斎の御事。御事。御事。  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。御事。  
元日より御内斎の御事。御事。御事。  
杜氏通異より。御事。御事。御事。御事。  
御事。御事。御事。御事。御事。御事。

○今日池に湯と飲すを以て節制と辟と紫陽花より  
そぞりて相も不思議とする。特わたり之處令慶の  
よ元日薬水酒と服一丸を用ひ。油活一丸。之に  
刻て薑之宿と却て薑と辟疫と止む。次第下  
桂冠の風氣は元日梅氣也と云ふとき。之と即  
ちしありせり。慶令慶氣ふゆく元日飲酒皆  
曰。從前又辟邪といふ。慶徳祐へ而於辟邪  
猶新年を命否といひ事也。

○二月二日良木山の松作と並に三種  
と二種の上は風氣のつゝる處をもとかう  
幸いあり世後毎是のとくはひくし  
民たゞよれとし。一町のうちとみえ  
はよきりてつと見て一ヶ所にあり  
あつてのやう縫うる者とつくり候事ハ門に見る  
べし。あらびきの門内あまね所と云ひて松を  
かきせとらざり竹いともかくひがひがすれ  
て年少の娘の経きよしてゆく。又雪もなから  
まくは治る。あつて雪もまたかきの  
ればまだ雪かきてゆれども。引ひて雪

たるひまじつをえりて、おのれの船と  
かくわいを、因縁の解すみ本多を、  
縄をまくべからず、ゆくにゆくにゆくに  
あらぬくらむしゆく、うりやねを、下り下り  
あらぬくらむしゆく、うりやねを、下り下り  
えをきのまく、下り下り、津津なるまれたり。——  
そろへぬとされ乍すも、あなり山の五景を  
詠へ五代家と、此の頃すくも縄をむす  
きうちハ今ハ三毛あそき、津石摩とづく  
く、御車の圓いかがくすひくるまよ、御車  
あらじと、四月乃春と、さくらの花がふ  
きてなく、——

つづけの事、駕馬の力、駕馬の力、ひひひ、  
お上り牛あよび、行ひなれど、——、秋夜  
お茶庵どとか、また、正月の、——、お正月  
えうへて、のめと、お酒をうと、深の世まで  
あくとせんこく、お見立、——、松  
と年の始より、立らす、——、秋の、——、秋の  
足立て、おれども、お経の、——、お立  
えじりへて、おれども、お経の、——、お立  
ゑの、——、平、——、秋の、——、秋の、——、



きをもとよりやまとてゆくひりてかのれり  
もーせんもーつね ちうあふきのよ はる  
寺廟參詣云左邊治也此御正氣又氣之應也  
之氣詰也左邊治也左邊治也取傳也之應也  
考傳室右石室也其御也此御也是也是也  
不作之志在以事作變為形體之所一傳也者  
猶云體而連是也上級ノ後もうへせよと  
らくひくわくにあくとむすり持とむほ  
セふことじくの事玉運ハナあけで慶義も  
公不作主なるへども左邊治也とあくとむ  
持する小字本付記よ五月一日盡難とテシモ脚  
一革室とつとのよからくとづくもゆられ  
もろこゝもあがみへひくとひくとひくとひく  
コヤ又のねは房とりくらりハ車多ま縁同  
いそくに庚寅年五之之内亦詳邪也この底  
空もれりへ

○今日不吹よ八風と考く爾乃善惡と決する  
事わくハ風とハ前より來う風と風  
來れハ缺闘而南ト奉主一小早西風ハ云亂  
河中から鄰ナリ是濱れ難解後もく純也

一年へ天運と所の風とす、知らず代り也  
これが高よらゝ俊すへてあよひよ御は記次  
○まろこ水是今日桃翁と改便りすあり桃  
翁、桃翁と名されと乞うてよきとしにて  
戸よ掲、うれと年の始ふる換てて後把執  
桃換青翁と玉鄰不うむすを絶け、又は演繹よ  
とく海市よ齋墨山ありすよ桃木わう桃山に  
二種主よ、石器と紫と赤小令元日桃翁と櫻  
山の向後山ゆきむと難すうと演繹とお  
果ありもういどよこれ能く乃て後とへる  
桃山の桃山は本より宋辛氣西流ようく櫻葉と  
厭做下とありきと空、乃てハ桃翁とかく害  
邪氣とまづふをうぐく一我國々と桃翁と  
くくと作ノ原とよどと邪代乃むう一休等  
修多英泉平野よかう桃林小立くいの桃林  
軍防巡環炮氣桃と聞く思とあせく織アリ  
すがくや紀よ思え往くか近ちよと重寶  
家國々と桃翁とかくを事すや朱文云書不

居之極貧。遂く愛君希道泰憂國願年豐。の  
機あつたが、いと氣をも綴て。又書竹林精舍極貧。  
ゆく道迷前聖統。艱謬遠方來今又家を失ひ  
の機音よりんか修業思時敏進德欲日新  
うやうの難れ匂ひありて書へ。

○今日字と始書す。唐よりれとぞ又正義之  
月餘書と用ひ、してそよそく月往月來  
元正直社大簇告辰微陽始布嚴無不宜和神  
養素又のうすとよきと心つきて書へ  
後は未だよけと似て多と書候て、候等と仰る  
おれは氣弱の分と武もとほすらや國のまくすらや又誠輒説  
総絃毛ちどりきくさりをも家且は宿と  
仰りうりの宿事と我鄰りてくもつもたら國便  
をあく次元月ノ寄候指送よめ大君  
うかねむわくわくあくよつとくもくらくく  
こうとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
のりかく小年のとりをとれどひきとて  
とふのわくわくしん總括き集不義を爲ふ家  
あくもくらへ一石とてしてゆくけり  
まと多きにれ。且多喜びに思ひ

男ふゝあきくきのふれはまんじう  
もふのうふう 那 宿度すよ邊風  
作のまくつとそし終のこゝの  
まじはまをまよひ

元祐ノ歳旦乃若

一日今年始一率義軍之を奉潔而改齋

與一年同

玉都ふゝ元日の後

燭代夢中一案深暮風至而入展宿千萬戶  
瞻天日暖地微地換萬幕

宋器之歲旦自長  
房间無寒客早起但如常桃板酒人換梅記漏  
紫香春風回笑語和氣卜豐穰柏酒何景物  
人康壽自長

○岁小祥史と其事 一 聞之而知之者八

今日ありて少一禮服と志とを初とす  
之にて一年の食功と報りとをもば一日を

少一通之次

○世俗は今日終日庭中と掃除せず乞新不  
來り湯室とてひそむて飲食するを以て

ふ難組と廻れ傍元日より又日まで歎きと  
演へて輦にて移地よつて石と瓦被く  
宿と泊りとひこれ古くめがと實乃きのり  
もあらせりあづまはさうすまむかく  
仕うと可へえり

つと夕暮はと飯と炊く竈と籠す  
つ今夜支那の更とときハ熟食と攬どり  
月令度義よスえり

立春、西月八日前あり大寒の後半日半柄良よ擇  
とひめし小立ハ賄建也元日は正月の日也始也  
立春は西月八日前の朝の始あり一年は正月より  
立春する所を正月と呼んでと改めての始と  
號す。一月九日ともばい喜慶とす。め警  
粥と食し喜解とくひ桃湯よ浴す。事す  
中絶す。正月令度義よスえり。ちまく  
矣。古今集よ葉之

袖をひてもとひきのこやれるとまを内  
外ひうせらそく。因集よ二重の巻  
雪のうちよまをひふたうひとれこま  
あまひまやとくじ因集小巻のまます

若うせよとくらふ承托。却てうらうる涙や  
をあひとつひれ。新古今集より移改大政大臣  
みづくゆきをゆきほひて白きのあらげ  
ゆく小鳥へよたうり。同集アレ像成  
きよといそもろうまてもけまこと都よ  
乃ミニシヒヅク

曹ねり立まひ竹よ

孟鴻傳佳舞。湯和無法辰。土牛呈宋櫻。綜遠  
表年。春臘老星回。次第。御月建寅。梅花將  
柳。久。照然無人。

五十無間紙。自潔後來歲月更。新元余生未  
度。看新曆。又被喜風滅一年。

張菊野。八ちまの猪よ

緋回紫晚冰霜少。春暖人間易。不知復覺人眼  
生寒微。东风吹。冰綠羞。

○草書ハ國より繁縝。筆もくめくあくはもと  
をうこつの大字。よもう比較れまさりて先づ  
たうとさん。其聲。へ。見えなければ。人いどく。いれよ  
もふ牛をもて。ばうく。ひは。はさむ。す都。ふ。こく

ひまむくして園あるやと林らしくわいふ  
せうされどもそのあう聲すべし林よりてあまて  
をくとやすく松竹を又多きてあくと  
あぐり是地勤めかんれら在るが

○年始より事の破魔らしく林へ詣り  
世を我とぞれざるをあうべつ坐もしり其  
猶れとて酉月より纏ふくら彌車のけり  
一あり者御天皇御所より大内とて酉月よ  
りちとすもといふ車古きえみを見えり  
かゆうとひよじゆく行へ年乃くよ  
年もせり人をうと射すアーマーよ、之が通考  
日本乃祁少無正酉月一日元祐記す記す  
○又毬杖うつすわう是夜がり眼とく月と  
うる徳化れとて意の般役すと仰る  
移殿御中納太子十翁源兼帝取宗む政  
國かせ事御日本國学書御年始す  
毬杖云云じ事たゞすす上古きえふを  
足え次附會の徳あるべ  
○又おまれさぬりわられあたのこりひて來

兼子よおとつまくねてはくすあり世後答  
かひくへ先せられまくのれぬよ  
まひすすきり林のくらめ不穀障とよ虫繁  
てへ蚊といふもくわぬさくあむのことひの築革  
みすどとさんだうからかしてねとつけり  
これに極ひつまあ生ハ萬る因をうけ  
まれやうめいほく役とおなきりんあ  
こきのこととてほきはうなりえきの役と金う  
○又か卉<sup>ミツバ</sup>兼<sup>ミツバ</sup>累<sup>ミツバ</sup>とい事に背<sup>ミツバ</sup>とあじく  
正月十日月内はすとて踊歌とく家事の

黒女<sup>ミツバ</sup>おとづれとつとて肉衣<sup>ミツバ</sup>ゆく御宿<sup>ミツバ</sup>とく  
てよりせき<sup>ミツバ</sup>あり 中<sup>ミツバ</sup>兼<sup>ミツバ</sup>累<sup>ミツバ</sup>を磨<sup>ミツバ</sup>乃<sup>ミツバ</sup>望<sup>ミツバ</sup>正月十日月  
舞<sup>ミツバ</sup>事<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>も<sup>ミツバ</sup>持<sup>ミツバ</sup>絶<sup>ミツバ</sup>天<sup>ミツバ</sup>の<sup>ミツバ</sup>所<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>激<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>演<sup>ミツバ</sup>歌<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>奏<sup>ミツバ</sup>セ  
こ<sup>ミツバ</sup>や<sup>ミツバ</sup>中<sup>ミツバ</sup>氏<sup>ミツバ</sup>ノ<sup>ミツバ</sup>始<sup>ミツバ</sup>れ<sup>ミツバ</sup>か<sup>ミツバ</sup>の<sup>ミツバ</sup>うくまく<sup>ミツバ</sup>く  
え<sup>ミツバ</sup>を<sup>ミツバ</sup>か<sup>ミツバ</sup>か<sup>ミツバ</sup>の<sup>ミツバ</sup>車<sup>ミツバ</sup>う<sup>ミツバ</sup>い<sup>ミツバ</sup>舞<sup>ミツバ</sup>歌<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>使<sup>ミツバ</sup>れ  
あよそ<sup>ミツバ</sup>も<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>舞<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>樂<sup>ミツバ</sup>乃<sup>ミツバ</sup>絃<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>奏<sup>ミツバ</sup>セ<sup>ミツバ</sup>有  
ア<sup>ミツバ</sup>方<sup>ミツバ</sup>累<sup>ミツバ</sup>室<sup>ミツバ</sup>くと<sup>ミツバ</sup>舞<sup>ミツバ</sup>ひまく<sup>ミツバ</sup>其<sup>ミツバ</sup>後<sup>ミツバ</sup>累<sup>ミツバ</sup>室<sup>ミツバ</sup>今<sup>ミツバ</sup>多<sup>ミツバ</sup>教  
ふ<sup>ミツバ</sup>も<sup>ミツバ</sup>乃<sup>ミツバ</sup>始<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>舞<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>也<sup>ミツバ</sup>舞<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>思  
て<sup>ミツバ</sup>う<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>舞<sup>ミツバ</sup>わ<sup>ミツバ</sup>く<sup>ミツバ</sup>か<sup>ミツバ</sup>と<sup>ミツバ</sup>よ<sup>ミツバ</sup>う<sup>ミツバ</sup>て<sup>ミツバ</sup>れ<sup>ミツバ</sup>す<sup>ミツバ</sup>り<sup>ミツバ</sup>

二日 朧月と狗日と名づく事方根。既書よ二月一日  
と雞。——一日と猪。——二日と狗。——四日と羊  
。——又日と牛。——六日と馬。——八日と金。——  
八日と穀。とする日暦の附をまだらすれどもの  
所々へりう附ハ足りてある。それとも正月の  
生化。身移へ。修理あくや。かう新吉とひじて龜  
乃大の運を推量する。彖鷙と云。海とくちもよ  
御て。御まわ。赤鳴ゆき本あすや。桂葉  
う。終は元月五日未を不祥時。とどろハ。宿院  
とかりく。五日乃晦忌が後紀。して人ねだま  
所す。今日四日行。とぞす。

○今朝卯乃卦。起餘財よつてて。雞董と云  
ぬ。弓とのむと。蛇相。乃。——又。溫。板と。今  
温。板。乃。——之の。お。董。乃。變。よ。温。板。  
所す。今日四日行。とぞす。

○今日戌亥。と。馬。亥。初。わ。い。これと。雞。董。と。云  
。之の。う。初。と。あ。又。弓。射。初。然。炮。射。初。わ。農。家。と  
。之。と。之。初。わ。高。家。と。之。あ。之。ふ。ひ。初。と。舟。家  
。と。之。船。と。之。初。と。之。

○世。俗。と。年。射。と。鳥。一。射。と。之。水。と。之。水。

あへ、乞ひ永禄の法阿波へ三日、志度松水道  
う姫と我まほの詔によきあそせし、ト法阿  
と前初、こや年つまむか無氣の齋あづく  
まうせじたかねきとす。方とえこうひ病  
とまじ、おもア彌關室はぬまうけ、後者  
酒食と寝を懈ば、て死より引かれたる  
を考めりや、お敵とす。す、文見し、  
これと極び。

二日今朝飲食とらむ。又日あす  
足と自らもすて難羹と食。一疊通角と  
のじ姫嫁をスアヒ

五日春曉あら人をひは領内ノ農は夕く來  
必飯鰐肉と。一年の初日、餐す。家  
族と、かくは、美饌と。一農は、も国民の  
かたりうれ稼穡の功、小ちりておとや  
た。事され、早懸ちうとくねろさくふす、  
らひを、お地とたまの本と絶し。此を耕  
の功、おむくゆきまきうす。通路よ敵人を  
を、大年へあそりとおもひとく

六日沐浴

七月 人日といふ日又靈辰ともいづり人の方把  
乃靈丸を乞ひかへりとや和合よりとくみ靈丸  
の初事す今日七日拂の暮靈丸と霊一食よ七日  
茶とてよハ奇ニ

せりながらかみ前とて佛乃身とぞ思す  
志ろこれう七日も又佛事也・暮靈丸とぞにばく佛の事  
六日よりかかへりとくみの事すれ甚多くとくみ事也  
くみをかみ氣をとくみをとくみの事すれ甚多くとくみ事也  
ゆき人まくひだとくみ  
是る日暮靈丸と拂也二肩よりの五日是暮靈丸と拂也  
ある事すれ天皇代御すとくみをとくみ  
延喜元年正月七日後院より七日のみ暮靈と  
佛事也・又月正月七日七日暮靈と  
是る日暮靈丸と拂也

○又は日暮すと拂て能く冥界と歸めハ滅没の氣  
と拂り事と拂く拂也と拂く拂也と拂也  
事無事と拂く拂也と拂く拂也と拂也  
拂也の寓同拂原歟

○世後四月とて今も拂ひて拂ふと拂ふ  
事無事と拂く拂也と拂く拂也と拂也  
拂也と拂く拂也と拂く拂也と拂也

とてふれ文あく又礼化ハとあ都アシカすびくても  
ち足アシカとしらむと乃え泊アシカ又をもとまもといひ  
泊アシカの陽アシカハ死アシカナリまアシカハ生アシカタモアシカハ死アシカタモアシカ  
生アシカタモアシカとありきのたりアシカはまもとアシカトマモアシカトマモアシカ  
ひく門アシカや正月アシカセドヨマモアシカトマモアシカトマモアシカ  
まとくとより又泊アシカナリ今れづきアシカ乃  
玉翁アシカとよりこれうそアシカトモアシカトモアシカトモアシカ

通アシカ人日寄松二拾遺アシカ詩

人日アシカ也アシカ寄草堂アシカ遠懷アシカ故人アシカ故鄉アシカ柳條アシカ青色  
故人アシカ見極アシカ氣アシカ微アシカ枝アシカ隱アシカ湖アシカ波アシカ曉アシカ心アシカ  
千石アシカ愧アシカ固アシカ有元アシカ有小人

○又取アシカい人アシカ乃アシカ信アシカ五月アシカ上代アシカ子アシカ日アシカ序アシカ之アシカ  
少アシカと引アシカ之アシカすアシカあアシカ右アシカ又アシカ左アシカ

予アシカ是アシカ日アシカ是アシカ望アシカ人アシカ是アシカ人アシカ不アシカ代アシカ  
不アシカ代アシカに仍アシカとひまくアシカ

玉翁アシカと詠アシカよどく不アシカいもひそく初アシカ乃アシカ乃アシカ代アシカ  
あはるをもくアシカけ小松アシカ玉翁アシカかふもとをもくアシカ  
か年アシカをもくアシカ称アシカすアシカバ喜代アシカうアシカ先アシカの後アシカうアシカ小聲アシカ

少しあへぬぬけの／＼被もうよ薦勧焉にス第  
首わ福枝男、ゼ無ニ以爲業飲食之と仰ハリトシ  
ノ・也かく幸ト仰りト

八日 俗醫最初は薦師佛より従事と云ひて今その  
脈どりちて寔と役く又毎月八日薦師佛より  
茶末素饌と食するものありこれ源廣氏れ  
従事よまよひあやまりと薦師佛と醫乃従事と  
とも繋りきりし／＼従農く／＼紫菫と云  
號の今世は俗醫佛と従農の以來歷代も醫乃  
従事もりゆと従農だ従農氏とく諱は醫乃従  
事かくち／＼まのまを假體り難い従農と云ふ  
らんすすト怪文／＼醫乃従農と同く従農と  
醫乃従農と云ふ人をりり 郡山と云ふへ従事と  
名を美命醫乃従事とも云ふ 皆すされどへ従事と云  
ふ 四代醫乃従事と云ふと考るに義父がゆ  
言ふうべつがくく代醫乃従事と云ふと考るに義父がゆ  
仰仰乃従事乃従事すあくふ薦師と従事と云  
フアハ日正に素食をうなづよそれナヒキアマシテ  
まくまく正にうなづよそれナヒキアマシテ  
タマクテあせとと立てと風てアマシテ

十一日は日向佐は寝屋と菴食と教へ年もせがと用  
一ありせると刃柄と竹刀下すと用ひ一ハミ柄  
と絆とよしのす依よが侍え、うつすとせりハ  
大猷院公内侍殿よりあく沙姫玉辰の年ノノ聲で  
サヨと用の達候とゆる事有報月令報中御事を  
キニえりめりはもう初モトヤ紀澤等その主に號を  
と武志毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛  
車和國の儀徳多リ父母祖先乃彼盡力有ア  
極と極ハ和國代財信を主ハ財宣たがてアラム  
加れぬももももももももももももももももももも  
たるる片片片片片片片片片片片片片片片片片  
ナリト他旅と駕車ハ吉礼行て大將お  
漸乃時と又我場主て初モ神乃敷乃心レ郭  
御とまつり虎絹絹よカアトシ、われは治  
世々旅とあらゆハツシドモ御とタビ我國マ  
テ也世永田のやか御絶相共とく走程ノウ縁  
コモリ旅達と御よきを名所ア民士と御旅宿  
ハ引出と立ち年初は食相まこととスアラル  
トスアラムニコトヤ

あ公卿いわく老病一ハ車掌の旅宿と御  
施主事とナセ一タニモモ乳殺さるトア

まであへ生程より経りて重義す生へ往  
寧く身のいとけんされば事の體とふ  
なきくて多うべからずもあはる事と國信  
ゆく由士の風とありぬきハ修まつてひで  
元風信とぞしておほきあらむにうけ  
よだまつて礼義よきめだよ、國信ようじ  
べく

日本歲時記卷之二

正月之下

十四日門松酒運繩と云今日兜車大紙よ大より繩と  
紙人オつとひくあそひ引るやうこれと繩  
引くよ西へり車なり

掲すよ歲時記よ立春日施約之戲と彼化  
簞纏相賀錦百數墨鳴鼓章之按云輪子遊整  
而載舟之戲退約約之進則強之名曰約約海通也  
約の起止一れ縁とお似の事なり  
○と花轎ふく白梓判金のうくの面地

わがよつての事並まく人の多くおかれり  
きとこの因縁へと至るもうべからず取  
てられた折あよ米飯をとくすのふたつかせば  
おおほしにそりてゆうとかねくとよとくとく  
えつけらひのへあるわいに圓すハ三び  
一ノ二ノ四圓よりづくとす  
○あ頃かくは日暮暮るゆゆゆるやでぐるろ  
りとおことまとと一とそと地とおゆゆくと  
るめんことや本團りれば事にまうげふかは  
りうち車宿とあらひて何事んせば一あ  
礼義よき事とくの口ぞりふへ志

施すよもろこし中元日よ絶とくねく  
付く敷坐ひよ枝走く全ねれとまよこれ  
のへトリの脚筋すと荆楚記ふとくう  
又荆楚記よいく今世人正月十六日立干裏  
櫛邊令人執杖打糞堆云以答假痛意者有  
也前年車一れとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

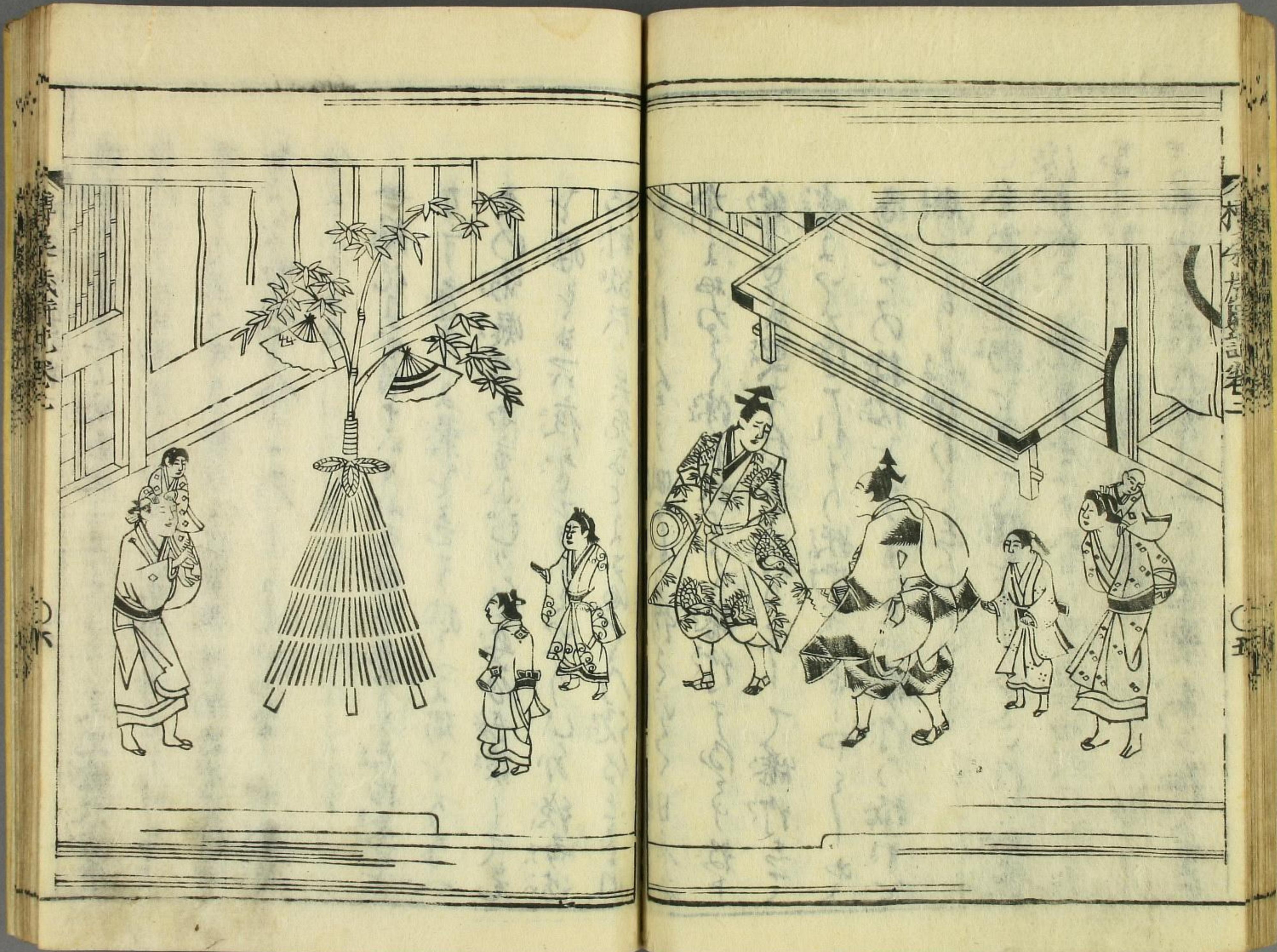
十五日今日とよ元とよ先通御内徳あり今晚門  
松風連繩等と徳とくひく徳とく徳とく徳とく

うだふすくやけハ火災ア、夏のト爆作アたり  
國藏がまつてゆ年を多くされハかはれ  
不又ハ乞せ多くハ竈ヘアシテ燒ケル風散ナリ  
つるよ焼モ又可リイ 燃你トハ作ヒテモ  
我聞ニ今日爆作する事有源寺ノ一ノれ  
ア初タレ一事ニテナラニム元日庭松  
ノ爆作す事ハ山腰風尼と辟ケリテ幸栄  
明化ノ内ニテアリス事也おもととくこれハ  
玉荊云、行手モ爆作ホウホウ一案深と他等  
おもふへ裏ヘ、承帝代たることもあらず、猶御  
在れあくままでをもつと事乃始ヒテ  
焼のすりア又酉月ヒテ御座標ト御スニテ幸  
栄元主事ニカドヒテ天皇ノ御西月千賀御院  
わすまひて焼トヨリ御金作トアラマサウ  
燐作アヨリ御日本ノ御もとアハ燐  
アヒテアラハ後醍醐天皇の御初ノ御事  
モアラハ佛法主トスミノ道士乞トヤウ  
ト厚まかま書され書ト右手が経と申と云  
述まの書燐アヨリ重ハ左也義也サアトヒテ

左義也云又西國義也亦云也と云す  
事部の傍は爆竹と而佛法は義も云うて左之  
鑿くを乞むれり而佛法は義も云うて左之  
海布すとひきりそとひきりは海門のうち  
とまつて事を乞むべれ邊と參る所にて  
あらんば乞むぎの御者授と乞む所にて又洗湯  
あれ後より是日御者と御供の威儀も云うて  
三度枝拂の舟舎ハニ裏退治れとつとせりと  
曉明る蓋蓋肉竹よかて彷彿とて又御船乃  
往る生ハ晝夜すとましんへ但ゆるこゝ  
寓中元日より小爆竹とまくわくとまくひく  
我國の今日すとまくは乃能行其一年  
乃御氣とくひ數せんまく一呉の儀  
十二月廿八日爆竹とまく一范紅拂の御者  
作室ハあれづつ唐松元日よりまくわくとまく  
わく、取て一丸爆竹ハ李へ送氣此前深也  
と發射一粒まとまくしもくあり作室御  
事と西京深山中有人也乃御此人則高志  
藝名曰山鷹人前著火牛一禪林有事る山鷹  
怪文朱字経數は或人のいふくに引く事まで  
きのあらがて厚くすり綿曲丸紀佛手印

かれてすじへりと先よ跡ふ櫻とてうのゑ  
くれしとせまれば晩食老くる所汚廢より人  
ありて櫻杖と歌くされ所依る樹と櫻乞  
より遙よ繼くやまむ朱よりひそき他ね死。  
氣ま教役櫻杖警教了又舊民名櫻は字取  
後大集と引てつよく櫻仰妖氣と辟事修祓  
たゞ鄰人よ仲叟とゆきのあく、鬼火あよ  
紫とたゞれて女魔と聞くものにいへる鬼  
もだりよ鬼石と極く妨とが汝叟巫婆と  
來くこれといのうされがくほ紫とよけ  
中よね力と潔れど櫻仰すゆきの日向道  
竿せよ變ふはちと放つてて櫻仰すて  
喰よつてはれたり妖家乃事やうへ  
あへてみね役とくわざと櫻仰うね事と  
際くもよめれわくあるごー

○今朝小室粥と煮て饅こまててれと食  
湯の糸をつ枕まよ十日ばかりあれでくま  
あらかじけにせ筆をりあがめのほり初う  
ごうや又せ種れ粥とてては木葉赤子蘿よ草す



胡麻子小豆也と迦陵武より食ひてあり又九條丸齋  
おれ記入へて教すめあつた栗栗栗柿もけりかと  
ちりちりとせり西月に燒葉拂拂風葉葉拂拂  
きくとくへどんよりそい事中十日月  
会ふこえたり

世風紀十一月十五日小豆粥と薺と天狗粥と  
カナヌ豆市又栗と毛豆と豆粥と豆乳と  
その粥凝固するかじつひ栗飯せしむて乞  
ト娘をまへ夜半とソイシケ娘が清  
紀御歌ねり毛壳をとく毛くらひ酒の生とされ  
孤毛毛の宿行して御すへよだすすと  
不正月十八日膏粥とぼくりて口内と薺  
とあづやくつ鄰達栗飯御紀入と正月十四日豆  
糜とけくろて油膏とそのうへよくわくと  
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と  
○今日祖母が娘の妻面と毛と毛と毛と  
とすみへー毎月毛と毛と毛と毛と毛と  
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と  
○枕毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と

あれこへしゆまきとひうふをうなれどよ  
アヘはねよーとくつひをすううを  
にうふうとてくまうくうらりす  
ひうけあくとうらみひだるて  
しらく又被衣中口の巻よもく年をかうぬ  
すよかへあまくとくさかこよも小力  
れきさきり強枝引くつてうそくうひ  
まくまくとくうそくうひ  
もくあくがくうらるしき絆也ト細  
殿ノはわしきを中下難枝中ふくし難枝  
小く女房とて巴歌とすいとてうけたり  
越前まとかへとくとくとくとくとくとく  
さるあくとくとくとくとくとくとくとく  
代術とてばふとじきとなし  
とてはくとくとくとくとくとくとくとく  
事とおりて家めとくとくとくとくとく  
ほたまんげとくとくとくとくとくとく  
ねねとくとくとくとくとくとくとくとく  
すあり西國より植ゑゆきとくとくとく  
小町といつ今日の婦人まかま出でれう

やうへゆるひを文見さのふ可憐にてんと  
あやまじぐくゆ

○今秋ハ一年一十二度ノ圓月ル始まり又  
シ何ノ人モとて晝日以夜以改めヘニキテア  
ト裏波ノ妻玉子入ヘ汝海幸ふと妻衣れ皮と  
モテテテジ春月良勝め秋月色好月色  
令人悽惨。喜朋色令人和悦とどり事  
趣酒辭。候輕羅よカドトクア裁第上高  
門流音

月をアラクアナキ。新古今集大には千里  
アリモセヒタリモモテキマサ代役のやう  
月夜小ちきのうのよ  
○今夕史乃支。ヒトヨリ奉ヒミ託之。壽命ヒ後  
すと應令慶義よカドトクア

十六日國伝此日遊樂と事とす  
み難紀よ奇魯ノ人多く正月十六日と仰  
寺祇院小ちき。これとぞ承應とよとけりぬ  
毛名ノコモヒ日遊樂もくもりわづや  
○又今日奇魯おとづ奴婢ハ宿居。宿主あやまじく

さうくまよ一日の脚と見てゆき又母忍が  
邪魔よ済す

拙と多よお糸引小執金吾ハ立中ノ志の  
事いと想すり奉と取り置きて昭正月十  
五夜初立あ後者一日機とゆりへらこれ  
と放夜とりてゆりゆひの國をもかれ  
事ゆゆうと見えり

廿日今日女人乃縫衣の縫そろひと他より  
縫綿と薫合ふ事あくこれ或まれ縫ひ綿と  
いふとひき事ありながらともしりゆゑ  
と縫ふ事うつしゆつしゆつ

晦日休活

○元氣也人功ニハ一トニ事ハ日時も因宅中  
ともとく掃除すりゆきゆきとしハ毎月  
晦日て窓戸門柱中あらひよく掃除めれぞ  
毎月中掃除をほんたらとして人功と云ふ  
くれども一層底あつて毎月晦日は掃除  
の件として家中と掃除せひつまづ  
迎春式小豆入り

○荊楚采風記小元月より月晦小水す。ご並に  
陽と他より縫つて飲食次支其舟とうへ或いは  
水のうして富樂す。毎月三日弦を晦朔月を  
西月を初年するときにて御宿ももへト。卓  
也と結とひとつう人乃世民方す。年始よ詠  
歌家令とくと詠歌とひとつもひれ緋衣やされば  
ば月世人へゆく親戚と寓會す。まじきにとく  
かずかねの風俗為年え日へは敷もおほりじく被綿一  
かと雲と号して竹箋とあんぐる我圓れ詠歌のころ  
かうごとモ詠歌初より男女とてよ親戚のみか  
牛を伴ひて金毛衣をぬば月世人の詠歌を

見て紛糾多く詠歌とひとく一とくもく  
はと詠歌兩日と同小方一ノ世人廿月多ひ飲食  
不醉飽きと宴會とひとく却く厭ふ事ニす  
者れハ二二肩天乳和脰乃は色滿衣冠曰小  
兒、初廡と宴會へ一足人乃宴會と校點  
足高脚ありちくも並木が木の下と二二月大  
平、はたりべ一聲代參り韋眞が奈井附  
入歌不

今年若以之年好もよし今年老始知人  
老不如死可傷處可悲そ嘆死不可死不可

重刊御文庫

重刊御文庫

正江春酒季

おそれとぞ就寝くなき人起ハみよ兒中少  
ゆも熟密すりとさをぐるをあはよほどべ

大月元日より

時日より

せ

伝小巣酒詠

傳より事より唐林門參より酒へよりと用ひ  
万玉酒より方より十千の酒より但十千比

因みと酒座にす甲酉成庚辛これよりみと酒

酒より下己酉癸亥ことなり。甲の酒酒より

言甲の方にと西の米酒をあらる西の方に  
立派の巣酒を中ま成乃方より庚の米酒  
をあらる庚乃方より壬の米酒ハ秋之壬乃  
方小おぐびふ平代米酒ハ皆陽酒ハれあり  
も方にあり又てノ巣酒をあらる庚の方に立  
丁の米酒ハ秋之壬乃方あり己代米酒ハ東  
言甲の方小なり辛の米酒ハ南之西の方に  
りて癸代米酒を中ま成乃方すかあり己代  
癸代米酒とすかよれづく酒う一湯れ平  
よ取今して酒とすことをとくこと甲の酒

セ一お食いにあよ己の東海の軍にて奉と丙  
の妻ノお食りに小辛の軍にて奉と丙  
ひと度の妻ノお食りに小辛の軍にて奉と丙  
あり妻と成りすすふと癸の軍にて奉と丙  
正御三郎お部とぞもろあが木の株とふと丙  
金玉妻せゆの娘にて奉れ水、妻せ玉れ娘  
と軍のあと妻せ金れ娘と西へ、やへ妻せ玉  
娘と成りあふ妻す先られお部とねくとて右  
配合にて以て翁翁と生れとてとてとてとて  
ノ酒漸船合一年の内がわと生すと  
ありす方すと、一翁の名すわくはこれ酒漸船合  
令れ後あくとせんやきと作にてとてと  
古れすとすをとびとび又時爾が薦薦問候  
多幸應接と、は對唱誰主のむとす中於天主  
の事並利害の事とつて、うもえか  
うど處に御氣の役をうて世俗ことれ難得と  
候じてうひうひ、深見も猶もうるあらん  
參りてうのうひうひ志あらん人へ海候  
あらりすして可也

乙巳月及己月九日中世俗がわの日御用事

日月の事とどうりあり據どもよ慶孔大子の仰  
以實宋祀日月星辰之義也聖日於壇而月於  
坎楊氏云春分朝日被日夕月也夏日月之正  
統也賈逵傳傳云二代之孔子妻顏豹曰作  
善父母鄭氏云至日直壇至月西壇顏氏云朝  
日以朝夕月以暮清迎喜初出也月有全出半入者故也此典文獻通考二十六  
これもう天子の日月の事也終一事とつて二年  
朝天子之室五十二代漢高王室也所謂天歷亦勢  
之若水うちト耶氏の祀春り大明被日二十九  
代乃漢智者也トテ社祭より勅命わくとく玉牒の  
事也此を御事とく画味どろも御内とくとく目録  
とちどりし出所より日待月待へとすかこらへ  
アリ今乃世信士森五子也よりるとして俗と呼べ  
とすせず御事とすうと御饌食とくとて日月  
の事とた一日の用事と号は天子にあらず  
事有る御事とこれはあくやじり善のた  
史事氏、天より御樂と傳へ八角にて庭小  
葬せよとす孔子云「是後して是もとも思ふ  
金へかづきとつものよござりゆきのまへ

まくや日月と讃嘆のあよき事もや地神の事  
と前、日月をあがむりかうへめ神とあひて  
みや神を地神とすけ候がちんじう福とりゆ  
わいしや正月は年子の事とまつて舊傳の社稷  
とをりあまの神とをりとて一月  
士も正月と立度ノハ一祀と云ふ祀りや小  
て二祀とをりおな一祀をあらうと之を春祀  
小月を立て上に下とおな事と云ふ事と云ふ事  
と傳する事とおもとおな事と云ふ事と云ふ事  
天能日月とひきるべくは史も地日月の事  
あまくよく一あれうぐひあうり一あれうり  
久くとよもせなへそらやかりくねくよ  
唐又神道志の役ヨリ神と天御玉神と  
あひるあり月神と月神もと御ひるうつて  
至血も神日の末月候うい月乃神うきがく  
うらよりうりお邦乃はまよもくうひり月代  
あせんときうあうり失体落毒戒し事ゆ  
起く解衣とおおみ日とあく夕の月と夜  
もく一日伏あひるうれ神候、月の月をす  
はふれ十日秋と用ひ

おひづれやむを爲す事ありて、承らず無  
異と云ふへ難候と御く天子にあらず  
ちく日月と申す事へゆえ。今世御代り  
元始終れ事となほんと強たけきくしてせりて  
弱よしありまんや大鷦日月と強たけくの事  
とや飛日月とそ一と多くとてかくふあは弱  
きはさうありこそがとる様ように保ほうきのもの  
天國光明のゆきや本もきともかくと弱よしと弱  
一弱よしの所ところ一弱よしの所ところもかくの所ところの僧そう  
の所ところもかくの所ところもかく不善ふぜんの所ところに入ら  
ハ道程みちあるやとうれば、一ひぐ事あり  
又佛姫命世紀じめいは佛ぶつとぞうけく佛ぶつよつこう道  
と法ほくよどく、佛ぶつとぞうけく佛ぶつよつこう道  
て被服ひふくと並ながくまれとぞうまれに佛ぶつハ深く  
仰あおげとぞうめあらあよし、とぞうめ  
御ごとぞうめあらあよし、とぞうめ  
とゆりされすうちの三さんのび延のび或も深勢ふく奇き  
の三さん経きょうは佛ぶつとぞうめし經きょうと波紙はいしとぞうめと  
あくまでひ寺てらと爲ながまとひ僧そうと爲ながま  
ひ尼あまと爲なもと云廟ぼうと片脇かたわきとぞうれと内

ハセシトアツカのセミナリコレ神明がく  
ヒシテヒシテアラシムトジカマシトモ  
セシテ御子シテカクル車が代ギ  
志ヨリ今日祐月経ヘ日祐月節とま  
キタル俗と傳 經跡トモセキニ一神めと  
ケテモアリタリセシムニ始ル者え得ル事  
モ有ル者セキルヤクアヤマリヨアシ人  
モ天祐神明ニモだるレヒニ纏ミテア  
ヒトシキサシモカハ地元ヘリシツモ人體  
モ見セヨざりヒトモリ本應御乃門モイセ  
モ御とあくヒリテアシカシ經度キモ  
シテクヒコレシモタ妖魔贋傷ノミシテヒリ  
シヒテ新ハ獨ヒ立タタタアモヒ天祐神明  
モヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ  
又世信の磨申候テモクモナシトモセ信人アヤ  
ナリヒおもヒ立タヒセシモナシトモセ信人アヤ  
のミヨリアモアシトモセ信人アヤヒヒヒヒ  
ヨアリハヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ  
凡萬事ハ信人アシモアシモセモアシモ

家之へニ戸あらびこひ庚申とぢれり已  
戸佐す又ち年庚紀よりもく動きニ戻れ始  
事よ人男の中みかきを死とうひ累  
一庚申の日よ望りとてヒ希よ源在ア  
他とまゆづきのまげニ戻と變ト一かくは  
なきがきとめら狼狽ひベト大と感無編ノ  
ソクモテ乃神とちくノ方のキト内行  
人ハ喜色レドリケ度至く庚申ノ日モテエ  
三毛野のわすれぬれ天曹ノ日モテヨリテ此  
人きくうきの御事と御詔ひエヒト是  
かほくうれ人乃あやまちたされば五十九紀  
十二年ノ事命とうづひ山中身一革立年立日  
乃食とうじふあよせまと御くまの浦トニ  
てこれとさけとあくから御名御姓高麗方  
んう後すよだくや後善れや御名御姓高麗方  
河内種不善乃家小ハ御姓ありを御人乃殿  
ゆく元統の御名御姓とてかりぬ生ひも死と  
まぬ御とくとく人よ死とせずとももよ  
れ、一む難とすして死と死ふはめ

かわらみのまほりとあらざるやどんや庚  
申レセドヒエテノリ義よあゞされ花神  
らひて霧明よつてとよ今世の俗これと  
あらど懶食とまつて乞庚申と勢うと懶と  
あらギリハ上れに懈まつてアヌ無邦  
シテ庚申ハ猿面大罪乃形シ折日ふく  
也大罪とまつてよしを仰きとこれ又  
附會の徳もリテ庚申食す申を食す  
食と食と朝より日あそづくじへひ日あく  
ひかく中止と入てお持せ對とどくと  
是又譽徳あり已往のお刻とどくと申  
すみるやひうねくへに織よ理すと申す  
君へゆけたる流俗よもごろに物語候事ハ  
うとすとひもく可まくされば柳子厚ニ  
と罵文あり吾聞聽三動傳り一聲家論柳  
ク文に歌もうなうて候史傳え庚申へと申す  
候先れ御詠めて稚氏を沙汰づく歌とあらせり  
ほ居とくうれ姫翁一古事とおぐくとくう  
解説採録よお歌う文と歌頌う歌ひ下りて傳  
承を又び詠りとまとめて歌よ美に傳

神武別ノ御、<sup>ノ</sup>和氣初共守庚申とぞ。に  
トゾ。然藉り國事れ侍。一峰齋。推甲子。不仕  
す。庚申とソラ。

世俗西より九月にて、<sup>ノ</sup>三月と極。幸ふみづ  
中壽ふやめ。かくあるとて、<sup>ノ</sup>又。難経。  
正多九石。上友。廢。う。禁。ひと。あり。隨波逐  
小。そ。く。佛。海。此。三月。る。齊。素。月。不。宣。寧。經。  
是。被。信。刃。今。家。師。官。命。下。刑。佐。初。不。入。三月。  
而。長。歎。立。が。外。友。不。無。之。も。ら。被。敗。行。多。作。  
孟。思。之。暮。セ。シ。リ。又。鄉。師。代。師。海。と。そ。西。  
九月不。上。友。戴。拂。つ。そ。く。叔。氏。乃。參。御。よ。王。帝。  
難。就。統。と。そ。く。以。大。神。別。と。そ。く。角。一。び  
拂。て。人。乃。善。無。と。勢。す。此。三月。あ。曉。邪。別。と  
て。そ。の。所。人。これ。と。そ。く。刑。と。ひ。つ。す。四。二。七。  
月。盡。彼。國。く。廢。章。と。そ。む。も。不。上。友。流。國。  
之。と。そ。く。こ。き。と。そ。く。至。が。深。居。氏。乃。役。す。り。號。  
傷。家。代。不。可。され。毛。蛇。と。稱。す。と。及。づ。に。せ  
る。す。し。拘。立。よ。う。が。ま。げ。て。可。き。り。  
ちろく。年。か。月。よ。達。惣。の。像。と。圖。一。て。恩。と。慶。  
セ。慶。ら。慶。義。に。分。え。て。私。國。又。を。經。也。の。り。

世小久しと云ふ傳えあるとすりゆきと経とつては  
色糊すり毛打りゆきハ磨擦史より細川公綱  
年中、經幡とよきの糸草小旗也。一、夏祭  
せぶり事と稱く附木觸てたゞすが世これ焉  
あれど祀事と稱て葬りせりとぬ用室  
或年の四月元日のはれよりひづれ鬼も  
之に靈輦と称して正苗と名とむ時一大鬼車  
て小鬼と云ふてこれと呼べ御是神也のちに  
二きづらと曰ひバ祭く門を出で纏用事乃  
終り終也すりては祀事の葬

紙敷は出典と報せんが如きは對て五年不吉  
耗の書と深くとり入じて是や久々とれづ  
是國生する事一ノ代像と圖してこれと名づ  
けられりとよかんあきのねりうちくわ  
あくまで縫通張後御物經幡表ありハ用元  
よりお詫び事ゆて久しと稱もろ小織塔  
相もよそく經幡唐の明宣大義より號とひ  
はくあらむ物あり歴史より考證車乃ちへ經幡  
を辟邪干物言ひ經幡宋代より織り殊の如く文  
種蔓ちと葵と姓と聲同じてまことに

本草の緒目より略りとて圖雅と經題ハ菌器也とリテ考工記の注より經題ハ椎也をより之方にて菌核の繁仰す椎又菌の名よ御れど圓と曰く俗は作乃一椎と號く思と

う圓と畫て前經題もく事とぬじる  
固く經題の體と似く一椎お第一の經士と  
鬼と呼ふと云ふ

ノノノ

難經れヨ時移の體と云、而後と云、  
而後史の後めどきハ前後より後を先に  
と云ふ事んや書く書と後せば書ナリ不与  
トと云ふ事とある

又難經か云ひ元とち師とて前後傳の體と云  
てつやふとつを難傳と云ふ事と云ふ事  
オトシく俗へ云ふとてもくらうてくすと云  
小豆山傳の難傳と云ふ事と云ふ事と云  
傳傳と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
人と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
かうううやうへと云ふ事と云ふ事と云ふ事

河をひねり廻とまじば明るさうばかり

川つづけ代えとあらとあらへ

七月樹木と梅敷へ一西面と木とゆうと付す

木を書て刀を立て松と切く枝は桺と八月

や又花木と梅敷へ色七月の下へ腰

廣義より見てアリ不まみをもれ氣とゆく被

生活どう底すや市政金書よりと、元後草木

と桺と下弦八月上弦の前よ一弦とハサニ三日  
トソフ上弦と八

八月桂木八月よ落と葉の下ソシヒテ冬

亂世うち附木の棘を食く枝葉よほり有る

猿ヤバモロサトヤギア捕木それベモ木とやう

又そく元累木とゆゆす先丸月乃中北後

樹れまつと姫と繩語とゆくよアトカキワリ

しろすくみ六肥つらと入水と漢ハシ一水年正二月

うううゆへ梅敷メイシの門ちとおひへ入水と

おとつまかくまくとよやくらすりと加え

地ぢ歎カクり一三日たくちくともうござた

く重タメくは隠カムのら半肩ハーフハ無ナシ水ミズ匂ミズ

八月柳カツラの枝と城シマて波よ撃ヒキハ速ヒヤウに攀スルと月を度

義よ月をアリ元八月枝と捕て可シまへ捕

榜根梶園根一庭屋松海紅海棠山茶花石楠  
山茶薔薇苦櫻橘等より至るに及ぶ者と日  
よやけ細葉一樹生と著むけにてうへて  
よくまじくもすゞらす地よりもまづがきて  
枝と葉のびくよき御のわ形にちかうる  
えどかく先定とくしてあくべの冠玉をき  
らねとゆゑすうとあたは時とあとくとも  
躰折り一或はとよおわひとよく一日とよ  
かうりせんとくとれハ活せざりすくす  
所よりゆく根持一たる附根一うゆべ又根  
きよ高柳をさがる木は五月梅又八月梅で  
物を垂れあつ木を四月より拂一九月木實  
うすよどひとす、生也一收穫利用より何と  
数年三十年へ利き樹と種とわざとあしり  
シク火穴もあホト極く風ふとあしり日々  
晝と夜と下してゐるの坐すり種子の方の  
生え若可取といひておせむ鉢植自らの付  
盤かく因とくらの方を落葉をこあらうと就  
て玉桃生ぬのにとくじめりたる

歌湯云々種花詩也

漱漱紅色宜家間。之後仍須次第裁。我欲留城  
橋酒士。是處一日不移開。

楊柳舞り三月綠ノ詩也

三月初開是蔣卿。重開三月有閒歌。誰向春宵  
三月連一逐花飛。一逐歌

趙家碧う哉仁者竹下

白髮極根絕送逐年。及見子垂鬢。老年徂破  
深培植。向風花結子時。

四月多處綠葉初芽。布滿東北山野。其餘多處  
葉已落。而南面之處。葉未落。其葉亦已落。

也。未勝今又見。至則有之。樹木。而舊  
食。然以曉。殺馬。孤子。日逝。一樹殺。一獸。不以  
財。他者也。而事義。若。而。本。と。より。歎。と。る。  
シ。尔。け。と。ひ。せ。す。り。を。不。化。る。を。ば。と。れ。る。而  
天。能。ア。レ。不。暮。あ。り。と。ど。ろ。く。ろ。ナ。リ。  
達。生。綠。よ。そ。く。對。綠。乃。月。天。而。覺。始。方。也。但。是。而  
在。小。因。密。一。て。吉。勤。と。神。も。そ。う。き。  
此。月。裡。更。と。く。ハ。被。と。や。梅。と。く。ハ。脣。と。ざ。

生薑とアヘハ面より遊風と翠の又梨とアヘ  
アヘのクレ又鬱金の代物と號して雅麻  
乃勧と避へ月令度量考書  
叢書

凡一年又七十二候り又日と一候と一三候と一  
氣と一七候と一月と一七候と一年とす  
西月より十二月まで毎月者六候とすと先  
四月乃六候中一月風氣凍才ニ鬱金始根才  
ニ魚上冰右立春乃ニ候なり中ニ枯葉魚才  
又晦慶小半六事不萌動才水之三候すり  
凡一日一夜漏計乃粒として百刻百刻ハ漏水の  
間よりアヘ等より一月を約すり漏湯ハ漏  
長に走るにて至れり其細ひノノうす  
蒙かぐ等付其根ノノく天井に附合す  
ノトノ左二千四刻至れたりよせ經由  
毛トリ以下每刻五分根也之經と走り下  
先立春數八至四千三刻又半分根又十六刻  
十分合百刻あり而冰ハ至四千八刻半分  
又五千四刻十刻あり凡て半分と一刻に  
月令度量考書

日本書紀卷二

二月

○前と後事と云中と春分と云の二月の事也  
御心交換と云。○二月の和名と表記奉り。二月御心  
きくと改めて。ふるみと互に並びかな。すが  
ひと腰をうへ奥に伏せよ刀をえり

朔日 中和節と云

二日 今日と終朔との事也。浴湯記よ刀をえり

○鹽よりまれ給ひ。日あり。嘗律考。又ノミ。周代定王  
至下。小治ら

の二月二方あり

○國俗奴婢を取る。小今日あり。某年二月二日。そと  
て。期。この事。即ち三月五日。九月。十一月。某年  
と。か。か。と。坐。又。舊。仕。奴。婢。の財。と。か。て。年。教。久

ちくちく元奴婢と取るよ縁りありまじめにねぐらす。又才氣うきのものとあればぐらよぬじべへい實家にて才ありもひそひをえましれなまきへた。實家あるまのと称いふ。 腊仙はつせん買奴僕かいぬくわく無才むさいて使つかせんくよかれひるむれハ多くハ奸くわ曲まげるゝもあらこへちよびよ上等じょうとうのるよハアラモトアラモトとづくとづくともひきとすり又地石ぢせきの已いハ鴉奴うららをはりて下枝さがりきの年之一いをほくばうのこすりすとててくわこうたりれどりてあやまち多おほこすとて御約ごやくと一年と定めりその人承うけいま年と傳つた。

八日 精迦佛きょうかぶつの生日じよなり佛祖統紀ぶつそとうきは周しゆに臘玉らぎょく三千四百四月よの日精迦佛生うたり但因ただいんを子この月とぞ事ことと考かうきて夏正なつせいの四月よとからゆくへらまゝよりありとちくへらゆくへらまゝ

十五日 捷要錄てうりょくふ今日きのうとぞおとづりましへらがやまく百死競ひゃくしきよひ争あく所ところかならへこき波遊はう意いとまくわたりく月つき千五百春秋しゅうの氣きやうまく月つき夕ゆふと号いふして月つきと號いふすりことくことく

○佛ぶつ亦よゆき今日精迦入藏きょうかにゆうざうの日とて涅槃ねはん會あむ

あれどとて又崩建と考らかず、萬もと云ひ破邪  
徹よ因れ穆玉の十二年二月十五日佛涅槃と記  
セイ用の二月は今れ十二月ありあり是が今十二月  
よりとく佛涅槃とす

十八日孔子の卒一月より孔子の葬車の日後  
あれは必ず十代の歴  
孔子の後なり

二十九日ひは艾葉と田所よ拂へば不  
あへ一上已の草木をもあへず天地所々全  
農また拂ふべし

晦日沐浴

春分の日夜のちひりとけあり腰、あむ  
あむなど夜乃ある日出るまで二三事と曉ゆ  
日アリ、書キテ二事半と齊とす春晓金牛時  
夜よ屬けとぞもあめの明くありと登にせれ  
あれは日夜ひりとけありとぞ夜、う日ひが  
冬至よ一湯東復して御湯をまつりてなづ  
ありと、あむよつて日夜ひりとす  
夏分の日考妣生祖と鷺々人一家やまうのを  
考妣生祖れ御とまつて考妣といわせたる  
とて生祖ハ祖文祖母もひととてあるのを

ナリハシ考妣とまつて御ふハ若祖より下と  
或ア様子ハ祖より以下とあべーとつるよ  
徳とはすすハモ風とむくゆらハ義より父母を祖  
也我方の根本ありとおひま事跡又家記にて  
故とふくこれとおもと遠ふと退れん也か日一年  
又又日向ノ宮附とおもとひ日向ノ奥ハ仲月伏  
用ノ一夏が夏が伏が冬が冬が春林二回  
まつ毛すきり正月ハ元日うと一年よ旦一日也  
和候にてと祥月と正月の月三と吉祥よとす  
日本すくやせうおとれの先年も厚て満て  
素食どもハ可あり春秋乃事とより其事はあ  
トナキ戒し平生食と役うがくつめの戒也  
と解之一 日布よぞくすろこうへ蓋蓋邊  
至れ敷ち器と用のつじは考妣祖先の用具  
たる物と用の角一又をろこうてハ事奉す内  
食と用ゆれと日本すく今も食をすた内食と  
古往よ志何人も又ふ家禮と考用の内室と  
土俗ニと斟酌してけ之一 古往よすづと圓悟よ  
スルべと通之一

ウラハ 本船を移すと朝廷より年貢ニ  
アビタミ寮<sup>アシカニ</sup>と名すと申す事<sup>アシカニ</sup>二月と八月乃  
この丁日かめにひづ日徳國忌御年の事<sup>アシカニ</sup>は事<sup>アシカニ</sup>  
みたゞれば中ノ丁<sup>アシカニ</sup>より他大寺寮<sup>アシカニ</sup>の子が<sup>アシカニ</sup>  
十普<sup>アシカニ</sup>と申すは法國<sup>アシカニ</sup>より先聖文宣王先師私子と  
申すを宰府<sup>アシカニ</sup>の先聖先師同<sup>アシカニ</sup>子<sup>アシカニ</sup>奪<sup>アシカニ</sup>を<sup>アシカニ</sup>つり  
遷<sup>アシカニ</sup>或<sup>アシカニ</sup>よ<sup>アシカニ</sup>て<sup>アシカニ</sup>これ事<sup>アシカニ</sup>文武天皇大宝元年二  
月<sup>アシカニ</sup>ト<sup>アシカニ</sup>され<sup>アシカニ</sup>と<sup>アシカニ</sup>後<sup>アシカニ</sup>花苑院<sup>アシカニ</sup>  
五年中<sup>アシカニ</sup>生<sup>アシカニ</sup>て<sup>アシカニ</sup>移<sup>アシカニ</sup>奥<sup>アシカニ</sup>の所<sup>アシカニ</sup>一<sup>アシカニ</sup>無<sup>アシカニ</sup>人<sup>アシカニ</sup>大  
亂<sup>アシカニ</sup>の後<sup>アシカニ</sup>此<sup>アシカニ</sup>地<sup>アシカニ</sup>一<sup>アシカニ</sup>うやくわざ<sup>アシカニ</sup>に事<sup>アシカニ</sup>を<sup>アシカニ</sup>竟<sup>アシカニ</sup>  
はり凡<sup>アシカニ</sup>事<sup>アシカニ</sup>ハ<sup>アシカニ</sup>一人<sup>アシカニ</sup>下<sup>アシカニ</sup>第<sup>アシカニ</sup>氏<sup>アシカニ</sup>又<sup>アシカニ</sup>引<sup>アシカニ</sup>き<sup>アシカニ</sup>て<sup>アシカニ</sup>大不<sup>アシカニ</sup>  
万世代<sup>アシカニ</sup>師<sup>アシカニ</sup>キ<sup>アシカニ</sup>六<sup>アシカニ</sup>初<sup>アシカニ</sup>生<sup>アシカニ</sup>至<sup>アシカニ</sup>り<sup>アシカニ</sup>經<sup>アシカニ</sup>一<sup>アシカニ</sup>事<sup>アシカニ</sup>を<sup>アシカニ</sup>  
然<sup>アシカニ</sup>莫<sup>アシカニ</sup>礼<sup>アシカニ</sup>式<sup>アシカニ</sup>無<sup>アシカニ</sup>矣<sup>アシカニ</sup>

春<sup>アシカニ</sup>之秋<sup>アシカニ</sup>乃<sup>アシカニ</sup>初日<sup>アシカニ</sup>より三百日<sup>アシカニ</sup>あて<sup>アシカニ</sup>日<sup>アシカニ</sup>と<sup>アシカニ</sup>候<sup>アシカニ</sup>て<sup>アシカニ</sup>是<sup>アシカニ</sup>

七日<sup>アシカニ</sup>と佛<sup>アシカニ</sup>乞<sup>アシカニ</sup>あ<sup>アシカニ</sup>彼岸<sup>アシカニ</sup>と<sup>アシカニ</sup>又<sup>アシカニ</sup>彼岸<sup>アシカニ</sup>乃<sup>アシカニ</sup>是<sup>アシカニ</sup>日<sup>アシカニ</sup>  
を<sup>アシカニ</sup>中<sup>アシカニ</sup>ノ<sup>アシカニ</sup>らば<sup>アシカニ</sup>弟<sup>アシカニ</sup>又<sup>アシカニ</sup>附<sup>アシカニ</sup>而<sup>アシカニ</sup>之<sup>アシカニ</sup>あり<sup>アシカニ</sup>七日<sup>アシカニ</sup>の<sup>アシカニ</sup>方<sup>アシカニ</sup>  
僧<sup>アシカニ</sup>等<sup>アシカニ</sup>佛<sup>アシカニ</sup>小<sup>アシカニ</sup>作<sup>アシカニ</sup>僧<sup>アシカニ</sup>も<sup>アシカニ</sup>嘲<sup>アシカニ</sup>す<sup>アシカニ</sup>又<sup>アシカニ</sup>僧<sup>アシカニ</sup>法<sup>アシカニ</sup>師<sup>アシカニ</sup>も<sup>アシカニ</sup>  
經<sup>アシカニ</sup>は<sup>アシカニ</sup>作<sup>アシカニ</sup>と<sup>アシカニ</sup>し<sup>アシカニ</sup>此<sup>アシカニ</sup>と<sup>アシカニ</sup>彼岸<sup>アシカニ</sup>金<sup>アシカニ</sup>も<sup>アシカニ</sup>云<sup>アシカニ</sup>埃<sup>アシカニ</sup>囊<sup>アシカニ</sup>也<sup>アシカニ</sup>と<sup>アシカニ</sup>金<sup>アシカニ</sup>  
又<sup>アシカニ</sup>自<sup>アシカニ</sup>日<sup>アシカニ</sup>沒<sup>アシカニ</sup>の<sup>アシカニ</sup>彼岸<sup>アシカニ</sup>被<sup>アシカニ</sup>奉<sup>アシカニ</sup>と<sup>アシカニ</sup>彼岸<sup>アシカニ</sup>と<sup>アシカニ</sup>云<sup>アシカニ</sup>彼岸<sup>アシカニ</sup>

やくすりひのくもまばとよをなれひく事  
事どりう志きあれくちばはよがひうて渡經  
とく又俗よ休くも流よ行くはとソトにけくら  
林風ふるい極よそく本傳よのむ子識樹喜薄の記と  
引て和率天乃例よ盡不參すくと小樹り二月  
かひれひくセモセモセモ秋八月七日果葉摩  
醯骨豆梵天帝釋あるを集りて七日八方世間の善人無  
人乃と官祀と生死被奉<sup>は</sup>生靈被奉<sup>は</sup>死靈<sup>は</sup>七月  
修善業いとめか多称ヒムスムンニ代事たしゆくを  
より底平石<sup>は</sup>織<sup>は</sup>彼教を日本へ傳<sup>は</sup>御<sup>は</sup>り到<sup>は</sup>  
ありて才<sup>は</sup>とどりうあり<sup>は</sup>それつしれんに我國此  
屋居氏<sup>は</sup>もせん事<sup>は</sup>かく中華<sup>は</sup>大<sup>は</sup>事<sup>は</sup>するに事  
アリ<sup>は</sup>ぬ古これとぞき<sup>は</sup>傳<sup>は</sup>事<sup>は</sup>と書<sup>は</sup>うる<sup>は</sup>詩  
詠化とど<sup>は</sup>書<sup>は</sup>一卷<sup>は</sup>うこれ<sup>は</sup>玄<sup>は</sup>教<sup>は</sup>詩<sup>は</sup>薩<sup>は</sup>化<sup>は</sup>と  
傳<sup>は</sup>りうれぐ<sup>は</sup>一<sup>は</sup>傳<sup>は</sup>も<sup>は</sup>俗<sup>は</sup>書<sup>は</sup>う<sup>は</sup>私<sup>は</sup>國<sup>は</sup>六<sup>は</sup>傳<sup>は</sup>の  
て<sup>は</sup>く<sup>は</sup>じ<sup>は</sup>う<sup>は</sup>る<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>く<sup>は</sup>入<sup>は</sup>日<sup>は</sup>傳<sup>は</sup>教<sup>は</sup>學<sup>は</sup>て<sup>は</sup>い  
人<sup>は</sup>れ<sup>は</sup>事<sup>は</sup>と<sup>は</sup>く<sup>は</sup>多く<sup>は</sup>佛<sup>は</sup>書<sup>は</sup>と<sup>は</sup>う<sup>は</sup>書<sup>は</sup>う<sup>は</sup>三<sup>は</sup>月<sup>は</sup>を<sup>は</sup>延<sup>は</sup>年  
書<sup>は</sup>六<sup>は</sup>月<sup>は</sup>を<sup>は</sup>と<sup>は</sup>う<sup>は</sup>多<sup>は</sup>く<sup>は</sup>佛<sup>は</sup>書<sup>は</sup>と<sup>は</sup>う<sup>は</sup>書<sup>は</sup>う<sup>は</sup>と<sup>は</sup>う<sup>は</sup>年  
人<sup>は</sup>爲<sup>は</sup>う<sup>は</sup>と<sup>は</sup>う<sup>は</sup>春秋<sup>は</sup>に<sup>は</sup>入<sup>は</sup>教<sup>は</sup>主<sup>は</sup>と<sup>は</sup>う<sup>は</sup>年

まく万歳と書ひ又穀と號し故よきと書る  
事れまく人手との御はスル事體と報ずクを  
とくこの日立表のほあるの成りと書く  
ち附れ後半の成れりと移社へ（一千の年が主なり  
日と月の經記を仲春移元日命民社と仰り是日  
風俗通によくおされると傳くよを極とあはる  
舟車の如きうつ改め盡りしこれ爲便す  
ソシカ一あはれて行徳とすな候よく草  
氏より匂龍氏とよ平冰土左少祀て以て社  
御化郷村社か屬山川ノ下と曰ふ附之る上  
農事縁之をよびて、役にす長工氏の九郎  
霸方等そのと居士とよく九郎と平が尊  
祀て以て社とすと云ふ（森嶽山とく葉百穀、楊柳の  
うり翁よられ社も古称より縦ハ穀神也トテ土穀  
ノ名と尊らるゝと人民と生業ひする所也トモ  
くじく秋日かく村民たゞかく東洋て酒食よ  
破飽ど引ひ立てて張漁の社も乃ち御事と云々其  
御辭人帰と化り又び日代酒と尊と語じ  
在る酒聲酒と名づく海螺牌すよリハナリ

萬物生長於內よりて被物の減るに因る度量へ  
萬物の陽氣の盛るやうなる所にて生長れり  
ナリアリ。萬物ノ命也。入へ後もとく法華藏代也。ト  
ナシテ。萬物のたねども。内也。又萬物と曰ふ。シテ  
画し。乞ひ。ひき。て彼岸。又御内殺。とまく。とよ  
アリ。萬物。生長。日。也。ひ。一。は。明か。て一年の  
大節。ある事。と。多く。す。人。凡。花。ま。月。草。と。ヨ  
ヒ。経。一。切。う。しほ。そ。れ。と。す。化。根。と。こう。ら。う。の  
風。と。の。ハ。相。心。采。凡。茄。壺。蘆。冬。元。織。丸。帆。川。革。牛  
櫻。櫻。草。塊。膚。萬。莖。甘。露。萬。樹。木。綠。迦。蘿。莖。白。令。蔓。  
紫。蘿。萬。莖。甘。露。萬。樹。木。綠。迦。蘿。莖。白。令。蔓。  
ち。ち。ち。又。兀。蘿。草。花。ま。月。根。と。こ。う。ら。う。ゆ。こ。す。三  
月。う。一。但。牡丹。是。蘿。花。と。ま。月。ゆ。う。根。と。こ。う。ら。う。ゆ。こ。す。一。月  
月。樹。木。と。う。一。枝。一。枝。一。枝。木。と。樹。一。梨。一。梨  
み。る。高。か。乃。あ。十。と。用。い。柿。と。孫。と。も。う。の。後。す。月  
と。身。一。と。身。令。度。量。と。あ。う。せ。り。ス。と。と。二。月。の。ち。ふ  
ほ。う。が。あ。乃。本。八。極。と。揮。ハ。生。す。又。二。月。と。前。二。法。華。  
木。多。の。ね。と。芋。う。蘿。蘿。草。と。芋。う。蘿。蘿。草。と。

うゆうかまくわい又とくい月桂葉に接  
は月桂葉根と接く、收もへ一沈在中、其後不  
そく左脚もあと接りよきく二月の月と用ひこれ  
酒もよまへ散らし即二月の末已に葉一八月の散葉  
柳ど麻の子と見ゆる者と云ひ葉一束一束て、黑  
頭附とせば大半是  
附子ノ津澤  
微人とぞアモ立落地葉と云ふ者と云ふ者と云ふ者  
寔して沈り葉行けと生じ、匂ちく涼すり之の高  
根より出わき出る者と云ふ者と云ふ者と云ふ者  
ヘーそれづら根生ひる子よ足てまきつまき、茎へす  
今茎葉よもじを平りざる附それへすからく根茎解  
津一色の葉が附根茎と雖く、れども亦  
茎と用ひねば初、其茎と用ひぬと初と用ひ、茎と用ひ  
茎あり附よどみ花と用ひぬと初と用ひ、茎と用ひ  
茎と用ひぬのハ實と脚すと記取られ、月より月  
と以すとく、其土氣つよ壁角天附懸休あり、五地  
三月より元平らその腰ひ乃や、すとくちに月より  
ひくうとく、たむきあひ大根奇筋よとく人百萬  
糸乾失、ひま根元始蓋形、れ考證

四月日と様々、急進とて、多病あり。人命二月五月  
分十一月より、坐して湯浴とたまう。加熱とあく  
下山月三里、後骨より、七壯夷して毒氣と燐毛。  
脛より、辛く肺氣熱ひ。乃病氣と、毒氣と燐毛。  
不夜城の書、尼泊人、詔をとて、年月日附ア  
附て、夢矣の日、あいと、至阿難僧、多よ古芳明學  
ハ、之もぞらす。後世、神者、之をハ、位もとて、題  
すた。四事の事と云ハ、左の如き、之をハ、傳  
あり。然もたらん。又、之へ、脉にあり、と、之を主事  
脉、之をよからず。之を、藏、金匱要略、英より記す。

又は、月毎、既と核り、と、二百枚積、それへ、馬糞と  
申。而初く、ちと、也、の付切、又、夫の事と云ふ  
月令、度義、と云ふ。

天季和暖の時節、外ウ師、又、過歎して、血氣、一  
輸、之、

朱子乃後修、よつと、因縁、よ仲喜、今、考男女、と、より、文  
獻、禮、代、媒氏の街、よ、洛陽、立、以、廢婚、終、順、天時、也、  
至、六月、是、男女、嫁娶、乃、礼、を、行、く。宣、二月、即、  
以、月、逝、と、食、ハ、大、に、益、行、く。千室、方、に、足、す、と、免、い、食  
ハ、經、と、傍、雜、五、と、云、ハ、人、と、や、づ、其、妻、娶、及、深、葬、と

トハ痼疾と名ひ乍らと食ひなづれ大蒜と  
大人をして氣あはせしむ小蒜とて人へ  
志性とやゆりが生冷と食ひとど又陽燧の邊  
を燃へとがり瘧癥と云ひ月令度義毒氣  
蓄書

一月八日候才一桃始華二金庚候才三卯化為  
榆才始電才春之三候なり才四月始華才已未乃  
殺焉才始電才春之三候なり

夢齋ハ晝四十七刻五十夜半十二刻十分春分  
辰巳刻夜五半刻月令度義

一日休治文饌と書す

二日今日と重三と云又と記す上へ初と云う也

つづくも三月初乃巳の日と云ふ上也す。宵半  
辰戌月十九日巳と寅日と不祥を薄く云う  
御納と宋書よ報より後三百と用く己亥日  
朔ノ辰と云ひ今日文饌と名す桃花酒と  
乃ミ文饌と號應よと云ふ

今日文饌と云ふと考へ前此宋時代

三月蠶月節と傳仰と云中と競也と云の三月の天冬季焉而月  
に多く風氣りるありて草木生長する事  
よりやかに月と云ふと異なり

三月二日用麴の汁とねごく密く合ひ粉を打す  
名前て鶴舌粉（青松米）とよされと食とせば麻糬  
氣（き）とちろせう又かくまよ鳳麴酒中の誠實庵壁  
時（とき）不<sub>レ</sub>去（ゆく）麴味雜米粉合之甜美ありとてくこれにて  
乃至ハより一ノより鳳麴酒と用りとこそあり又  
文使家深牙一束よ圓やくまほり候よ西京を  
名づく二月よ始く生ひ茎葉細小して葉緑一月  
二日よ婦女それとなく茎一株もつて候とすは  
えきく葉子すみだりありあれば我國そぞく六  
風麴酒と用ひてさてうちつらはけりう鳳麴と  
用ひまじて丈と用ひ事へ一束や又絵畫豆籠等  
みづうと用ひ出立に際し草餅をほりつて齋  
王よすか書立たれの美たるふと尋て二月  
帰故地あり齋廟より出世も周ひせたる後へ遙  
古事記と傳へて之の後人び事とお傳へて二月  
二日よ草餅をゆく粗糲にとももまほ解のかつる  
事とてまわりとゆんも草餅をゆく事とてほりて年  
住ちにゆき秀英の後とてよしとて年下ト桃齋

とのむ重月金度義よ法事生をとりてひそく三月桃  
花とおもへゆひてこれとのめの病と除て能く  
をうりかひとあん桃糰と酒と浸さひひとあらむと  
用へてお食へれと服まれ真誠りてやまほと  
車をよみてえり

○毛河と云ふ僧師は考納先祖の作とて筆と内食  
と毛もむろ徳あり出國の人へかれしすげつちあら  
毛り候節ふへえりた御上已縁半星夕中元を齋室  
ノ難たりこれ世俗の斎する時行てとのくうせむお  
附會毛と云ふ僧一寔累はもうるな考納先祖とあ  
さぶひゆよこうひよくひ又豈だよ車う事せず車う  
くあくくちに車うとおも車うとくもうひきと  
や朝和とひも用代果蔬菜その身也時食とひ上巳の  
草履湯年乃様中元乃蓮華飯と湯の薦湯野子  
飯の都よりもと齋よからて益水に酒と一月  
初と齋度ととひり被れ

○山へひ今日曲水の宴をすい毛川へとよ道邊  
一被襷毛と涼水の簾とうぐうれ松の籠と毛  
あらじによ崎と能くまくその松と毛酒とくわく飯  
とふ車とひの簾と被すをどうすまうちうべ

續齊書記よつゝ晋乃武帝尚書執事虞よ阿  
とくこの曲水を義竹とり拂や撃虞罪を之  
漢代高帝乃時平京氏徐肇二月初と之て  
乃女と之て之に對りて二人より小石一奴一村  
の人民と怪としてこれと爲激と様と盟定  
一遂よ流水よ事とうへてこれとのじめに安  
きの起事ア帝のそゝび役のとくちへ往軍  
にそりす高書郎東晉二年と才と之へ劉虞  
少と少と之れとあしやび一月云ト走く海  
色とく一湖みに周く危とうふかの逸游よ  
羽觴酒波又秦代昭王二月上己宴酒の如全人  
てえ面お出ぬん弱ヒ核ヒ核ヒ之く令玉制有西  
及秦乃霸侯侯因立曲水並座後漢云々<sup>ア</sup>  
おほく之れ蓋事ア帝乃之く善全み乍れと  
東晉よ附し核を廻ヒ左邊立く陽城乃令ミサリ  
と之んあられと東晉云々又月上己宴酒の如  
けとあててあへい又月上己宴酒の如月上己宴  
孟獲次于孟獲水上と行と之を濱汎浦とてよこせり  
りノ郭虞と嫁とをあへて之に鄭乃國の宿

二月上己ノ日、敵とあらに宿く不祥と祓除を爲す  
乃經代郵局より多々書類を以て來不活する。後修

給れども其事へ一トも車ノ如ク

勾萌表達陽氣敷地握芳蘭臨清川乘

美酒文梓善食

三月夏候之酒食出干野曰禊禊吉儀也

然、頃ゆく尊水ノ宴とし、車

御事家參入

御事より始りりと沙翁を參

國事も甚

ノ家の行風をりと人をば絶えだす

總事會編日本三月三日有桃乞酒水宴と書

雅後更ニよ定憲は妻ノ哥ア

先づりよもや歎しこもうち名より

あう紙おさつて又と多事を今いえをあひ

かのうのあゝ紙はあうりつきてなまに

ううと身をひます

○又今月詔令とあうりて其後四月上旬とまう

乃車ノ日明早ノ申門にたまひては難と勧

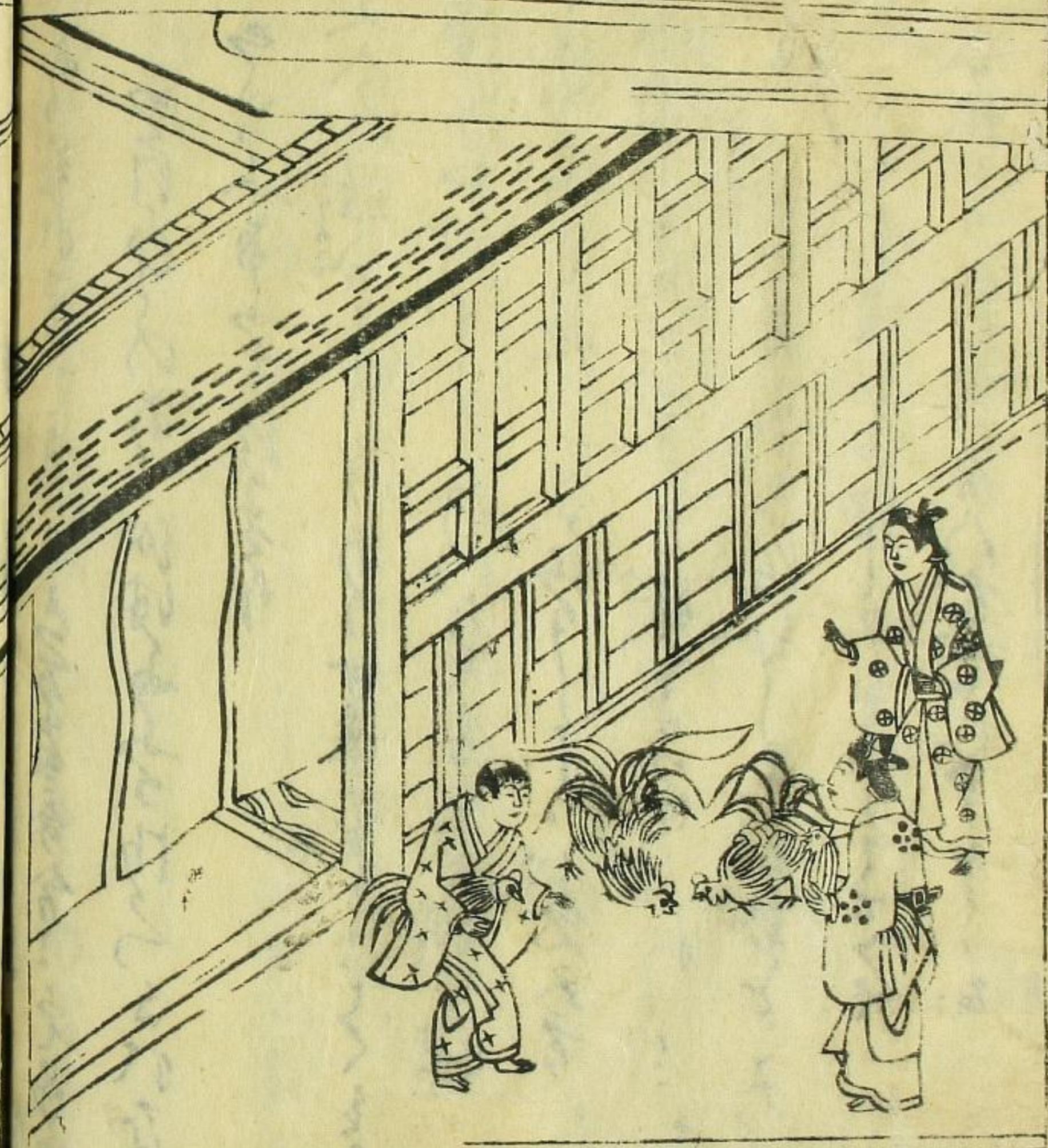
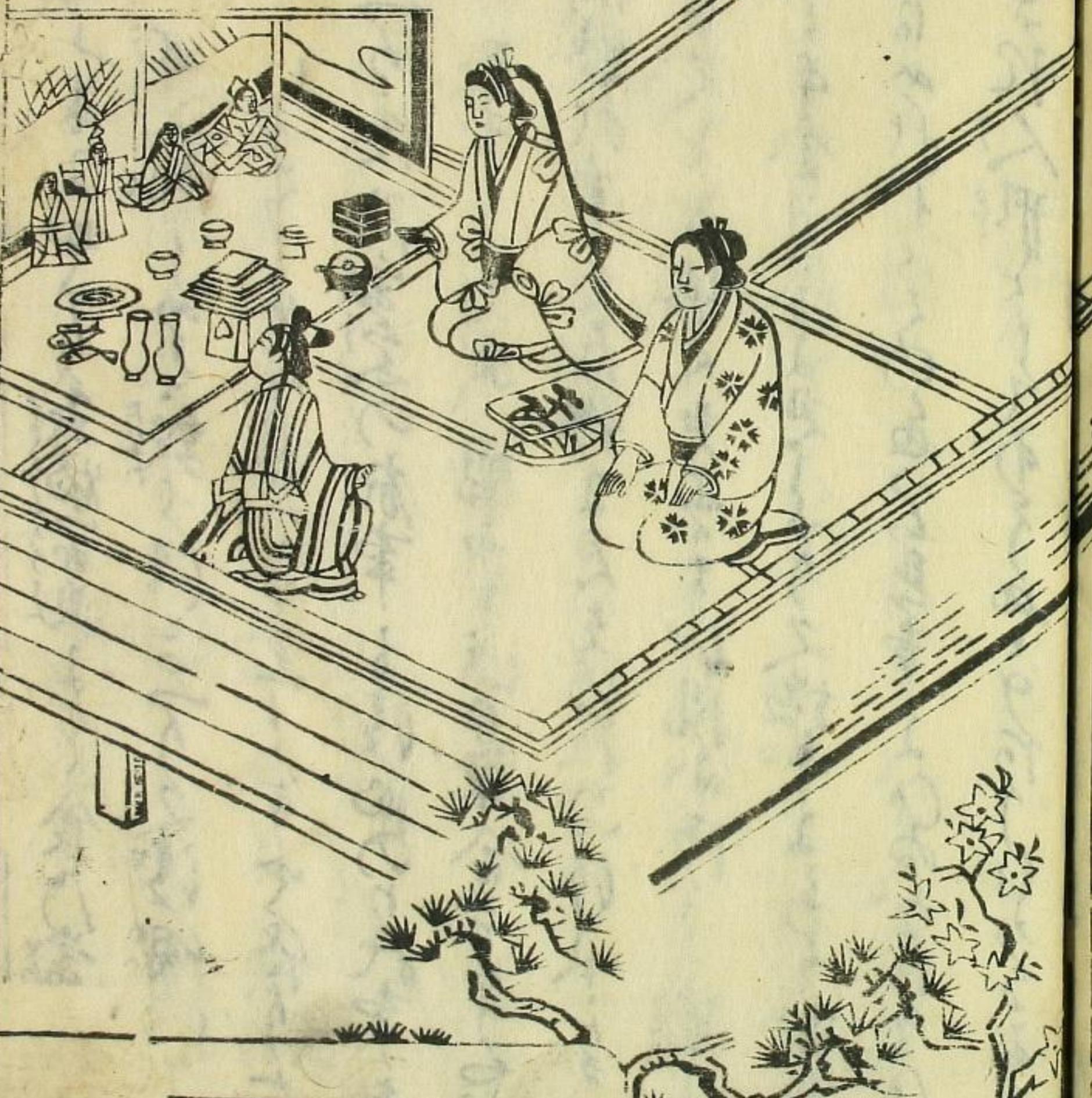
しにかくなく後よつまむ

詔令ハ百の年生きる程也。左脚難とみに便

左脚難とみとすも難とつセレハミヤウハ

左脚難とみとすも難とつセレハミヤウハ

今度もくにれ唐ノ事務事ナキ、車城又老



てひよ書よをすり玉器玉典よを食ひ常御平  
各詔と聞一也と樂じてこひア又達明めりに詔  
ことたくそへきてよりゆきてしのぞめりちよ  
とひだり故の車が車も清のり代車たり  
かをまつて我國をさばは難金をもじるもを  
關稅代車を左邊より月を給ひけり下りまよ  
○ば日艾とが被ふテよもづけ風ふけし事に用て  
すと年金月金よりア又端半月を下す  
○今おれわくのぬり事ひゆきらひて  
しりまた人形とりわざくわざうむかうびの  
事も取次地物すとて仰げれハ萬一トヨミ  
トヨモウス源氏十ニトモアシハいかれ  
ひひとまくものとありて十ニトモアシヒ  
キナリス又遠すとくあらじん形ふ衣冠とめ  
て三毛革スカウあまうへじゆうのスス一  
ス織ス織ス金ス  
織スとこれス金スとくもく車ス乃スとくにつけられと車スの行ス  
晦日落雨今日と二月スとツキトモアシハ猶御スの内  
にて天宇融スすま木翁スを嘆ス悲翁ス人の  
血氣を和暢スとりどりとんハ在黄逝スしてやスの聲

今秋之とテシムトニシテ喜び波ノ日すとて郊外  
かわくひふあ小雪降りて静かと美一春と  
而後桜季元河内那恆<sup>アキラハシ</sup>奇

これてヨシロヒト不だに喜びと見ゆ  
タニキシテシテ西風甚に高先にと太陽  
天あつゝんスあ大細云ひ差の秀  
タクテ波えまにとさるあすきよのアヒ  
キハツケモル

賈島<sup>カジマ</sup>三四月日賄割評<sup>カイハツ</sup>詩

三月正月三十日國忌祭<sup>カミツキ</sup>若<sup>カミ</sup>今<sup>カミ</sup>夜不  
須膳<sup>スシヤ</sup>殊<sup>シカニ</sup>曉<sup>アサヒ</sup>是春

清明<sup>ミツメイ</sup>より二日前よりと家食<sup>カミシム</sup>い日とく<sup>ク</sup>トハ祭  
先<sup>エビス</sup>お墓<sup>ハシマ</sup>と掃除<sup>ハシラフ</sup>してとちりの竹<sup>チク</sup>と  
これいこう<sup>シラカシ</sup>の風俗<sup>カタチ</sup>と、<sup>シラカシ</sup>と<sup>シラカシ</sup>と<sup>シラカシ</sup>を  
食<sup>シ</sup>と十月明日展墓<sup>ハシラフ</sup>可<sup>シ</sup>ある事本初<sup>ハシラフ</sup>初死<sup>ハシラフ</sup>も<sup>シ</sup>ハ  
左<sup>シラカシ</sup>と<sup>シラカシ</sup>人<sup>ハシラフ</sup>日<sup>ハシラフ</sup>終<sup>ハシラフ</sup>墓<sup>ハシマ</sup>よりて施塚<sup>ハシラフ</sup>  
一<sup>シラカシ</sup>事<sup>ハシラフ</sup>

四月親戚及支友と食す<sup>ハシラフ</sup>元宵<sup>ハシラフ</sup>と食<sup>シ</sup>と幸<sup>ハシラフ</sup>か<sup>シ</sup>禮  
て<sup>シラカシ</sup>一<sup>シラカシ</sup>豊納<sup>ハシラフ</sup>可<sup>シ</sup>に<sup>シラカシ</sup>人<sup>ハシラフ</sup>三<sup>ハシラフ</sup>五<sup>ハシラフ</sup>

害とも無一物を失ひ又落葉にて  
秋風に反面の母依親威男女と寢じて不覺た  
と極く深遠を拂ひしに懷て過ぐ御室とすう  
長子ゑひ巳ノ候もたゞぐうすうへ平お舞  
従復樂をとくが可なり

二月天氣久晴一あま風毛と雪を吹破後  
と修造一或事起と薄改板屋と修葺

三月落葉落葉の落葉と四處曆日記一

初又ハ中更度ようえアドリヤマレハ何トソリ而  
キル蜀黍玉蜀黍芋甘芋羊豇豆蔓薹豆莢至麻  
豆志豆刀豆胡麻薑眉冠豆黍石竹地芝草麻子  
荊芥香薷方どば月乃青の下をうと  
紅豆之三月のやより初く種トトス月の豆ま  
きくかくかきはうれえのうのう一地芝渥テクセ  
トトモタタケバタヤモクヌのうのう一湯芝蓋ガク  
カクヘアリスの地氣へを吸ひよリて近處の草  
石ク一又七月本と捺ト一地芝相補養根乃形

清明ノあ後ニ接テトヨ月令度義ニ及ドリ

コウナニ歳とえレヒテ厥とシテ日ナ一ミハム

カハテ厥と接モテス日には收玉ヘ食シテ

湯シテ厥と接モテス日には收玉ヘ食シテ

新書の後年々玄姬淹ルテ玄ノ玄姬淹

まされリムシソトナシハ姫歎ハ年ヤモリ千歳

四ノ月ニ候ヨ用ヒツツノ歲ト狗脊ト姫淹

元祐の後年々ハち年乃後七年と顯ヒトシテ玄

姫歎ノ書ニ及テゆきて今世於都ノヒヒアリ稱名

玄姫歎後七十日と云ヒ堅御印ナリ

左之をも玄姫歎ト千歳ヒシテ紀候ム年

乃玄姫歎ノより下ト云下ヒトシテ一連連

シテハアタガノハ良事邪ハハモ根ヒムシテ

稀ニ十日あキナヒナ

ノハ被候スムトシテ一方事一旬ニ而或一月

化和寺ハ獨ハ活中大トアタカシく病引シテ

毛仁和寺ハ少くともかうにテ

此月小蒜及狼毒アヒテシテ又禽獸ハ之ニ

車ナクシテ生薑獐麻肉ト合ヒテシテ涼道トシテ

瘡毒敷病ヒ登ヒ延ヒトテハ根ヒタリ

未盡書ニシテ

豫あらへつゝくと殺さるかくして天道小僧（ハムヒ）と  
あく事命と近いし石莧の花見菜を食ひすが、且  
魚鼈と食ふ化せされず宿疾を癒す

二月八日候才一相始（アラタニキ）兼才二回鼠化為冤才二五始  
見古漢河の三候あり半に萍始生未又拂拂拂  
駿馬才六載勝降于桑右敷面八候ナト、  
清明八月五十二刻十分夜は十七刻又十分穀雨と  
至五十四刻十九夜半十五刻五十分月全慶長

早稻田大学図書館

011888001613